

325

3783



始



謹みて賤しき此の書を悲母慈明忌の靈壇に捧ぐ

325-378₃



著泉清岡笛

大正
4. 12. 1
内交



諸の世間に於て何か最も富み、何か最も貧しき。悲母堂に在
 す。之れを名けて富めるとなし、悲母在さざる、之れを名けて
 貧しとす。悲母在す時を名けて日中とし、悲母死する時を名
 けて日没とす。悲母在す時を名けて月明とし、悲母亡き時を
 名けて闇夜とす。是故に汝等勤加修習して父母に孝養せよ。
 此の如き人は佛に供養する福と等しうして異なるなき福を
 得べし。

心地觀經

序

一たび垣間見ては、なかくに忘れ難き真如の君に、
晴れて遇はんとする禪は戀にも似たる哉。文は手ぬるし
口舌は及ばず、胸に思ひのかずくも、云はねば云ふに
いや勝る心の苦勞、かのプラトーンの説きけるイデアの
戀も、いかでか之れに及ぶべき「本來の、面目坊の立ち
姿、一目見しより戀とこそなれ」百夜のみかは、雪山六
年の端坐、指は愚かや、少林門前の斷臂。「我のみか、釋
迦も、達磨も、阿羅漢も、此君ゆゑに身をやつしけり」

戀に上下の區別なく、心を以て心に傳へ、禪に古今の變りなく、機と相應じ、豁然として大悟すれば「うれしさ」を昔は袖に包みけり、今宵は身にも餘りぬる「法悦となり、一たび之れを得れば「忘れぬば、こそ思ひ出さぬ」平常心これ道となる、禪戀同一味。戀を生命とする女性、豈に禪と没交渉ならんや。彼れが、面目に對する愛を轉じて、没巴鼻の境に向け、翠帳紅闌の戀を移して、柳暗花明の天地に注ぐの時、立處に禪の面目は活現せん。枯木寒巖は禪にあらず、華藏世界の美を感得して、人中の芬

陀利華たる花のいろく、釋尊、これを拈じ、迦葉微笑して、眼も口ほどに物をいひ、達磨、之れを齎らし來つて、一華五葉を開き、花も實もある心意氣を不言の間に弘む。

清泉笛岡君、今、此の心意氣を傳へ、戀に泣く美人が嬌態を寫して、佛々祖々の玄機を語る。文に艶冶の趣ありて、想に超脱の旨を存す。孰れか禪、孰れか戀、「美人禪」の一書、讀み了つて、恍惚として此の美人と姑射山頭にイデアを語るの感あり。あはれ此の君、今又清泉に

粧を凝らして、世の人を迷はさんとする。

時雨そぼ降る乙卯の初冬、山茶花咲く代々木の村莊に

咄 堂 居 士

例 言

薔薇色の豊頬、房つさりした緑髪、星の明眸、真珠の皓齒、羅綺にもたへぬ柳腰の、若さの血潮漲る二八か二九からぬ女、それは言ふまでもない美人である。けれどまた、色が黝くて、あばた面で、眇目で、獅子鼻で、鰐口であつても、頭髪が縮れ毛であつても、またはクル／＼の尼法師であつても、白を轉がしたやうな立姿で、家鴨のやうな足どりであつても、よし冬枯の立木のやうに何の生氣もなくなつた老婆であつても、それもまた美人とする見方がある。美人に、貌の美人と心の美人とあることが言へるからである。玉耶經には、容顏の端正なるを美人と名けず、唯、心行端正にして人に愛敬せらるゝ者を美人と名くと説かれた。容顏の端正、それは美は美であるが心の端正なるのとその美が大に異ふ。貌

の美は愛を惹くに足るが敬せられるといふに至つては、心の美がなく
てはならない。菩薩のやうな外面に夜叉のやうな内心を裏んだ美人
は貌の美人に尠くないが、どことなく潤ひのある、温か味のある、淑やか
な氣高いといふ風丰は心の美人でなければ望まれない。内外雙美な
らば理想的であるが、形相は醜く、内面が端正で、それが姿色態度
の上におのづから高尚な美となつて露はれる女、それが眞の美人であ
ると謂ふべきではあるまいか。この書收むるところの女流三十人、花
のやうな貌の美人もあれば、貌を壊した比丘尼もあり、色褪せた醜い老
婆もある。しかも何れもみなその心の玉を琢き、その内面から芳しさ
を匂はせた、謂ふところの眞の美人でないのはない。名して、美人禪と
いふ所以である。

大宇宙の絶大なる靈威を直觀し、大自然の玄妙なる眞理を體得する
それが禪であるといふときは、方處を絶し無間にわたつて禪理の遍滿
しないところはない。この廣義に従ふならば、苟も多少の眞理を諦觀
し玄機に觸れた者は、何時でも、何處でも、何人でも、みな目して禪者とす
ることが出來ねばならぬ。が、一口に禪といへば、歴史的に釋尊によつ
て唱說せられた佛教、そのうちで或る形式によつて既成されて現に禪
宗と呼ばれて居る一宗派の教義を指すものとせねばならぬ。で、この
書に擧げた三十人は、矢張り所謂禪宗の教義を參學した禪者といふ意
味を主として擇んだものである。中に、二三のこれと直接の關係を有
たぬもの——法華の信者または念佛の行者の如き——をも加へたの
は、それらの行實がよほど禪味を帯びた點もあるので、特にやゝ廣義の
禪者として扱つたわけである。

哲學史や倫理學史に於ける哲學者や倫理學者の唱說するところのものがそのまま哲學であり倫理學であるやうに、その宇宙觀が即ち佛身觀、そして同時に人心觀で、是心是佛、即身即佛と説き、理論言詮の外に實地體現を旨とする禪の立場からは、禪者の行實そのものがそのまま禪の教理である。故に禪の何であるかを知らない者の眼には禪者の體現した事蹟を見ても、何の意味か全く解し兼ねる節が往々ある。でこの書ではその一人々々の行狀に就いて煩を辭せずに通俗的の解説を試み、古人の話頭を引いたり先賢の説示を挿んだり或は配するに古い支那の女流禪者を以てしたりして、門外の人、初心の者にも成るべく興味を以て讀んで、そしてほゞ了解が出来るやうにしたいと力めた。枝上に枝を添へ蔓上に蔓を引くの迂、亦たゞ婆心醜きを忘るの微意に出でたものに他ならぬ。

佛道極妙の法則としては男女等一である。男子禪だの女流禪だのと別々な禪が言はれる筈はない。「美人禪」と名けはしたものの、美人も來れ醜女も來れ、堂々たる有髯男子も來れ、よぼ／＼の翁嫗も來れ、童男も來れ、貴賤も利鈍もみな來つて一等にこの禪海に浴し、何れも均しくこの妙味に饜くことが出來ねばならぬものである。わけても、女流の事蹟ばかり蒐めたこの書を繙かれる大方の姉妹だちにして、若しよく外貌の美のみに憬がれるが爲めに、ともすれば心の玉を塵に塗れしめ易い女性の弱點を矯めて、以て所謂眞の美人たる徳を完成するに資する分あるを得るならば、そは當に著者の満足光榮ばかりでない。

加藤咄堂先生と高島米峯先生とは自分がこの書の第一枚の原稿にペンをつけかゝるより、いよ／＼刊本となつて現はれるまで、終始いろ

くの意味に於いて多大の同情を寄せられた。そしてまた特に序跋を以てこの賤しい一書の冠末を飾つて下さつた。謹んでこゝに深甚の感謝を二先生に捧げたい。

大正乙卯秋普天率土歡天喜地の月

東京市外代々木の僑居に

笛岡清泉識

目次

漆桶打破

千代能

有名な女流禪者——北條時宗の族——鎌倉の文選と金澤文庫——佛光國師の逸話——千代能の思想見識——悟道の歌——承陽大師の語——常濟大師の語——桶底を打破せよ——作佛を圖る勿れ——洞山非佛——南嶽磨甌——須く親參實究すべし

善知識

一休の母

五條橋邊の狂態——活如來——母臨終の手書——南朝の後宮——二度の宮仕——珠籠と譏誣——佗住居——一休の出家——爲謙翁に參ず——一休の絶望——悲母の護念——不惜身命の修行——洒落中の眞面目——母の人と爲り——敬虔な念佛行者——一休悟後の孝道——水かゞみと假名法語——老後の安詳

却火洞然

慧春尼

雪峰と玄沙の語——道を知らざる者と道に囚はれたる者——

悟は徹底を要す—優れた美人—美貌を燦いて出家す—遺傳か感化か—人生の悲惨事—煩惱の犬—禪機か狂暴か—目健連と蓮華色—光篋裡の入定—古人の生死透脱—石霜の第一座—禪の眞乗と生死—婆子燒庵の話—無心禪—極端な空—管野菅子と慧春—可惜乎

世法佛法

新松院尼

武田信玄の女—婚約と破談—武士道氣質—無垢の誓の淵落—武田氏の滅亡—自負心と志操—徳川家康の殊遇—信玄と尼公—不退轉の道心—ト山和尚の法を傳ふ—臨終の遺言—一百年忌

松杉風外の聲

了然尼

了然の氏姓—中宮の少御—良妻賢母—眞實報恩者—二禪師を訪ふ—面皮を焼いて志を達す—慧春と了然—初發心時辨成正覺—達磨の誨勵—不惜身命の道心—了然の禪機—その後半生—その學才

不空中の空

通女

元祿時代文運の盛觀—通女の祖父—通女の伯父—通女の父—驚くべき慧聰—處女賦—江戸に下る—その著書—その精神修養—通女と佛教—了然との談論—盤珪禪師との問答—その辭世—珍らしき女丈夫

慈悲心孝順心

慈門尼

少水の魚—人生の無常—深刻なる感悟—躑躅一番せよ—入道の第一歩—薄幸なりし慈門—その出家—得度の師—乞兒を憐む—盜賊を説服す—佛心とは慈悲心孝順心—榮西禪師浪士を憐む—女性的心操

俳味禪味

其一

捨女

俳諧の天才—秀句—夢の知き幸福—佛經の文—莊子の語—捨女の出家—盤珪禪師に參ず—賢女三物—本來無一物—ホーマーの句—大禹の語—具舎の文—無一物中無盡藏—四祖の垂示—悟道後の捨女—捨女の子

其二

園女

目次

眞妄不二——山神と樵夫——眞の眞相——園女と雲居和尚——果して眞悟か——永嘉と長沙の語——俳人としての園女——阿西惟中に配す——芭蕉翁に相見——その晩年——その奇行——その辭世

其三

千代女

禪の不立文字——眞理と言語文字——禪と文學——南嶽六祖に謁す——貞室と芭蕉——千代女盧元坊に學ぶ——文學の妙趣——女らしき情味と俳味——その出家——酒脱の風事——一念三千の句

畫趣禪趣

玉瀾

畫は無聲の詩——玉瀾の素性——大雅と玉瀾の爲人——畫人としての玉瀾——和歌を冷泉家に學ぶ——榮辱を顧みず——夫婦の參禪——同唱同和——大雅の奇行——酒脱中の眞情味——似たもの夫婦

山河大地鳥の聲

お三

夙に鐵文禪師に參ず——雞鳴を聞いて大悟す——承陽大師の

説破——釋尊の獅子吼——眞理は純一平等——迦葉舞を作す——佛祖と同唱同道——お三の機鋒——白隱禪師とお三——趙州と尼——是か不是か——お三の辭世

閃電光擊石火

慧昌尼

俱胝和尚と尼實際——慧昌白隱に參ず——山梨了徹の省發——了徹白隱に見ゆ——慧昌了徹を抄着す——慧昌了徹再度の商量——青州布衫の話——頓珍漢——低聲々々

超佛越祖の機

お察

白隱門下傑出の女居士——處女の希望——法華經を尻に藉く——大なる自覺——向上一義の見識——佛に唾する行者——丹霞聖僧の頂頸に騎る——丹霞木佛を焚く——鷄の眞似する鴉——皓布棍——白隱の探竿——眞參實悟——その結婚——その禪機——老僧を折倒す——鏡清失利——孫の死を痛哭す——頂門の一針

唯心の淨土己身の彌陀

原宿の老婆

鳥の見かた蟲の見かた——萬法歸一の理——萬象獨立の法——

目次

萬物相關の道——最善最良の國土——先づ一心を明らめよ——
白隠の説法——老婆の徹悟——白隠に——一掌を與ふ——趙州の筭
——唯我獨尊の機——黃檗羅漢を罵る——臨濟の生理——解脫文
殊を打つ——人々眉毛眼上に横はる

言詮不及

原宿茶店の婆子

一五五

周金剛——餅賣婆の禪機——徳山始めて龍潭に參ず——經に依
るべからず經を離るべからず——何れか姉妹——白隠の道を
得——白隠參徒を激勵す——趙州勘婆——鐵火箸頭の禪機——上
智下愚を論ぜず——一超直入の妙機

大疑行

政女

一六五

殘酷なる運命の手——脱首座に始めて禪要を聽く——趣向の
標的——大疑行——心理學者の説明——非思量——恍惚として寢
食を忘る——懵乎としてわが子の名を問ふ——珍寶の客——智
慧の光明——白隠の認許——その禪機

大死一番大活現成

遊女大橋

一七三

人生の流轉幻滅——才色雙美の佳人——無垢の白百合泥中に

泥中の蓮

其一

遊女鷗洲

一八六

委す——客の指示——放下着の處收得了——タゴールの知言——
大死底の修行——管子の言——宇宙は一大寶藏——香嚴と靈雲
——雷霆を坐斷す——白隠禪師に見ゆ——栗原一素に配す——そ
の最後——その詞藻

其二

遊女佐香保

一九一

吉原の名妓——唯一の情郎——情郎の死——厭世と道心——深夜
奉行所を叩く——樓主の同情——素願を遂ぐ——その晩年

其三

遊女吉野

一九六

島原の名妓——吉野廣東——大名と小倉色紙——僧日經との相
見——痴人鍛冶屋某——灰屋三郎兵衛——傾城の實——榮庵の驚

款——平安幸福の境地——奇談に富める生涯——眞乎泥中の蓮

其四 遊女歌川……………二〇四

鄙には稀なる佳人——江戸の某と睦ぶ——江戸見物——百日の暇——三年の約——その死

其五 遊女黛……………二〇八

薄命な女——その人と爲り——客の死を弔ふ——彼女の慈善——官の表彰——眞の佛教徒

大奮心 宜詳尼……………二二二

憤せざれば啓せず——大奮心を要す——雪峰の苦修——長沙の激憤——人形のやうな小比丘尼——祕魔道人——憤を發して行脚に出づ——雲山の法と愚溪の道——隱山の家風——常不臥十三年——證契即通——悟後の大用——瀛山劉鐵磨の話

眞の出家兒 見泥尼……………二二三

月潭老人の三種坊主——佛の字義——大乘佛教徒の理想——宜群と見泥——誠拙和尚の風骨——紺繩熱鐵を打つ——向上更に

向下——大拙の道風に接す——綿密高雅の風儀

大信根 智教尼……………二二九

投子牛在の話頭——人々本具の牛——心裏面の主人公——襤褸に金貨を裏む——佛の語と經の文——自信力自重心——禪學の三要件——水月菴主——道を大觀禪師に得——淨門の尼純圓を度取す

實參實究 純圓尼……………二三六

夙に安心を求む——如何と問はざれば如何と答ふる能はず——師の示寂——深き考と強き決心——智教の啓發に逢ふ——靈光發耀——大觀禪師の點檢——悟後の參詳——鬼大拙——實參實究二十年——永平廣録の文——慕大の志

自家の珍寶 歌女……………二四三

先生と古本屋——寶を懐いて寶を知らず——始めて純圓の指示を受く——最初の光明——純一の心行——一休和尚の修行時代——釋尊の難行苦行——本地の風光に接す——大觀禪師に見

ゆ——不幸中無限の幸福

念佛の三昧

妙船尼……二五二

尼の人と爲り——念佛三昧を行す——不思議の光明——一頭の古狐——白砂の奇特——奇特を斥く——不動の信念——眞の念佛行者——正法に不思議なし

身心脱落

蓮月尼……二五八

姿色才操雙美——引續く不幸——尼となる——和歌を學ぶ——貞烈自ら顔容を毀ふ——陶器を露いて自活す——二利圓滿の行爲——家越の蓮月——伏見人形の本尊——禪の第一義——念佛の玉三昧——脱落平安の生涯

漆桶打破

千代能

有名な女流禪者——北條時宗の族——鎌倉の文運と金澤文庫——佛光國師の逸話——千代能の思想見識——悟道の歌——承陽大師の語——常濟大師の語——桶底を打破せよ——作佛を圖る勿れ——洞山非佛——南嶽磨颯——須く親參實究すべし

業濃國興性寺に住してゐた如大禪尼といへば、女流禪者として最も有名な一人である。如大は法號で、その出家前の名が即ち千代能である。千代能は、かの相模太郎麿の如しと謂はれ、蒙古十萬の兵を塵殺して國威を發揚した鎌倉執權北條時宗の族、顯時の女である。

平安朝の末期から、大學國學の制は既に廢れ、延いて鎌倉時代に及んでは上下たゞ武を勵んで學問を顧みるものは鮮くなつた。貞永式目や東鑑が和漢混交の文體で書かれてある如く、當時に於いては、實は純正の漢文を作り得る者は稀な状態であつたのである。たゞ僧侶だけは儒書を兼修し詩文をも能くしたので文事は自からその手に

歸し、武將たちは皆僧侶を顧問とし、學問しようとする者は寺院に往くといふ風で、後世の所謂寺子屋の稱も是から來たのである。斯ういふ時に當つて特り史家の注意を値したのは、千代能の祖父實時、父顯時、及び兄貞顯等が深く學を好んで、武藏の金澤に文庫を建て、和漢の書を蒐集し、廣く講學の便に供したことである。一家學問にいそしんだ中に育つた千代能が、おのづから當時の女子には稀な學者になつたことは怪むに足らない。彼女は實際和漢の學に通じ、また當時に勃興して殆ど一の流行のやうに武士たちの間に行はれた禪の宗乘には夙く心を注いで熱心に參學してゐたのである。

千代能が參じた師家は、かの有名な圓覺寺の開山佛光國師である。國師名は祖元といつて支那僧であるが、その頃支那は北方蒙古の忽必烈の爲めに宋の社稷は滅亡に歸し新に元と稱した頃である。祖元禪師は即ち宋の遺民で、北條時宗に迎へられて日本に來り、鎌倉上下の道俗から渥き歸依を受けてゐたのである。禪師がまだ支那に居た

ときのこと、元の兵が既に宋の地を蹂躪して到るところに殺戮が行はれ、禪師の寺へも大勢亂入して大刀を禪師の頭上に擬するものがあつたが、禪師は端坐不動のまゝ、

乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空。

珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風。

と言つて自若たるものであつたので元兵は、是れ生死透脱の大徳であると、禮讃して去つたといふことや、また日本へ來て後、かの元の大軍西陲に寇するに當つて、時宗が武装して禪師を訪ひ「大事到來せり」といひ、却つて禪師に「如何が向前せん」と問はれて威を揮つて一喝すると、禪師は「眞の獅子兒なりよく獅子吼す」と許し且つ「慕直に進前して回顧すること勿れ」と激勵したといふことなどは、有名な逸話で禪師の豪傑僧であつたことを想見するに足るものである。

千代能はかゝる良師家の爐竈に入つて惡辣な錮錘を受け、勇猛精進して工夫鍛練を專にしたのである。性來利根であつて、専ら簡辨果敢の風尚を先とした當時の武家

に生れ、そして學事に心を仰ける父祖兄弟の間に育てられた彼女は、更にこの參禪によつて、その思想見識は激濁として尋常婦女子の外に俊逸したものであつた。

夫れ地獄遠きにあらず、極樂亦眼前にあり。人生百歳古來稀なるに、秦皇漢武長生を求めんとするも徒らに千歳の笑をのこし、彭祖が一擲の菊水に八百歳を露の間に保ち、東方朔が一枝の桃三千年を瞬時に過ぐ短かしとやいはむ。廬生が邯鄲一睡の夢、五十年の盛衰長しとやいはむ。鐵拐琴高今何地にありや。

とは彼女の思想、彼女の人生觀を表はした彼女の語である。彼女が佛教の玄理に造詣することよほど深く、三界唯心、心外無別法と觀じ、唯心の淨土、己身の彌陀と信ずるの見地に立ち、本來本法性天然自性心、本來の面目に於いて凡もなければ聖もなく、悟もなく、迷もなく元來不生不死身で、此去つて遠き彼方に特に欣ぶべき極樂もなく厭ふべき地獄も見ないといふ見識から、幻滅有漏頼むべからざる世相、その世相に執着して極り無き差別是非の見を起す凡夫の迷情、それらを總べて一笑に附し去つた達

觀の胸次を示すものである。

彼女が工夫辨道純熟して遂に豁然大悟の境地を見出すことを得たとき詠み出でた歌として、

とやかくとたくみし桶の底ぬけて

水たまたねば月もやどらず

の一首が傳へられて居る。一休和尚の假名法語などにも引かれてあつて有名な歌である。承陽大師は

佛法をならふとは自己をならふなり、自己をならふとは自己を忘るなり。

と示され常濟大師は

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ。是れを本來の面目を露はすと名け、亦本地の風光を現はすと名く、身心俱に脱落し坐臥同じく遠離す。故に不思議不思議能く凡聖を超越し、迷悟の論量を透過し、生佛の邊際を離却す。

と説かれた。桶の底ぬけたとは、直に自己を忘れ得たのである。即ち本来の面目を露はし本地の光風を現はしたのである。心身脱落したのである。凡聖を超越し迷悟を透過した境地である。

佛といひ悟りと言つて向ふに立て、そこに到らう、それを得ようと焦せるのは、向ふが佛で此方が凡夫、彼れが悟りて是れが迷ひといふ二面相對の妄識情量で、丁度桶に水を入れて、やれ濁つた清んだ、清んだ濁つた。濁つては眞如の月が見られぬ、清ませくとさまざまにたくんで、たくみ騒いでいよく掻き濁して居るやうなものだ。一たび佛よ悟よといふその情識解了の水を充たした桶の底を打ち抜いて水もたまたらず月もやどらぬ本来空の地に到り切つて見れば、そこに眞の佛が現はれる、それが眞の悟りであるといふ消息がある。故に坐禪の要術には「只管に打坐せよ」といひ、または「諸縁を抛捨し萬事を休息して善惡を思はず是非を管すること莫れ、心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れ」と説き、衆生執持の見は捨つ

べき迷ひであるが之れを捨て、更に佛の智見を冀ふといふ、その佛見法見も尙ほ是れ迷ひたるを免れぬとせられるのである。

洞山大師が曾て衆に示して「須く佛向上の事を知るべし」といつた。ひとりの僧が出て「如何なるか是れ佛向上の事」と問ふと洞山は「非佛」と答へた。

馬祖道一禪師は、その始め傳法院に住して毎日坐禪ばかりしてゐた。南嶽懷讓禪師がこれを見て是れ法器と知つて早速往つて下のやうな問答を試みた。「貴公は毎日坐禪して一體什麼に成るつもりか」「定まつたこと、坐禪して佛に作るのさ」「南嶽は黙つて退き一片の甄を拾つて來て馬祖の眼の前の石の上でゴシ／＼磨き始めた。馬祖が怪んでまた次の問答が交された。「甄を磨いて何にするのか」「磨いて鏡を作るのさ」「馬鹿な、甄をいくら磨いたつて鏡になるものか」「坐禪して佛に作らうといふのは丁度甄を磨いて鏡にしようといふのと同じぢや」「では佛に作るには何うすればよいか」「例へばこゝに牛が車を駕いてゆくとして、若しその車が動かかなかつたら車を鞭つべ

きだらうか、それとも牛を打つべきだらうか」こゝに於いて馬祖は何とも對へが出來なかつた。それから南嶽の弟子になつて正傳の坐禪を修し遂にその法を嗣ぐに至つた。作佛を圖るの禪は所謂待悟の禪で、有限的相對的である。相對比量の情識を捨てず佛にならうと冀ふのは、牛車が進まぬとて車に鞭つやうなもの、桶に水を充たして、これだけ清んだ、あれだけ濁つて居る、と兎や角と企んで居るやうものである。この桶底抑も如何に打破すべきか。不待悟の禪、究竟如何にして眞悟に徹し得べきか。非佛といひ、作佛を圖らずといふ、果して何の佛法を建立するものか。端的若し誤つて知解分別を弄するものは永劫に漆桶不會の漢たることを免れぬ。最も親參實究を要すべきところである。

印破虛空千丈月。洗清天地一林霜

——天月中峰和尚

善 知 識

一休の母

五條橋邊の狂態——活如來——母臨終の手書——南朝の後宮——二度の宮仕——殊寵と讒誣——佗住居——一休の出家——爲謙翁に參ず——一休の絶望、慈母の護念——不惜身命の修行——洒落中の眞面目——母の人と爲り——敬虔な念佛行者——一休悟後の孝道——水かきみと假名法語——老後の安詳

「いよう、和尚さん、これはまたいつにないおとなしいことぢや。今日は盆の十五日、あれあの良い月がお眼に映らぬか。チト浮かれなさらんかいな」ホロ酔ひ機嫌の若者四五人ドヤ／＼と入つて來ると、「あう、ようこそ、ようこそ」と、和尚は悦びを満面に浮べて迎へ入れる、忽ち酒杯が取り出される、下地はあるし御意はよし。若者共は歌ひ始める、舞ひ狂ふ。耐り兼ねたか和尚も連れて踊り出した。「竹の切りよのたまり水、すまじ濁らず、出ず入らず、人と契らばうすく契りて、未までとげよ。紅葉をばみよ、うすいが散るか、濃きを先き散るもので候、をどれやをどれや人々よ、わ

かいがふたゝびあるみかや。只何事も若き時には誰も彼も、いたづら狂ひはあるものよ。それも苦しいものでおじやらぬ。毒藥變じて藥となりぬ。なにをなげくぞ川ばた柳、水の出ばなを歎き候——うたはゞ歌へ舞はば舞へ……と、謠の文句も面白く踊りぬく。若者どもは感興いよく耐へかねて「みながこのまゝ街へ繰り出さう」と言ひ出した。和尚も、面白し、とばかりに腰に大きな瓢を提げて先に立つて馳け出した。若者どももわれ後れじと各々異様の風體でついて出て、五條橋の邊りを足拍子面白く踊り狂ふのであつた。和尚は酔興のあまりに通るかゝりの婦女を突き倒す、婦女の良人が怒つて掴みかゝる、忽ち大立廻りが始まつた。若者どもは敵の脚と間違へて和尚の脚を引き倒す、和尚は腰の瓢も微塵に碎け、衣物は汚れ破れて見るかげもなく、だらりと垂れた自分の禪に幾度も躓きながら、ほう／＼の體で寺へ逃げ歸つた。この和尚とは誰でもない彼の一体であつた。全くこれは一体でなければ出来なからう。現代は文明の餘譯か時勢の進運か、酒池肉林の間に、猫と稱して猫にあらざるや

さしい動物と、戯れたり戯らされたりして、浮いた／＼でステ、コでも踊る、といふ聖僧知識は珍らしくないとやらだが、それとて、まさか大道を浮かれ狂ふほどの勇氣はあるまい。それが室町時代、僧侶の持戒行法がやかましく謂はれた頃に於いてあるから、一体の如きはたしかに誰れも出来ない藝當をやつて退けたものと謂はれねばならない。

一言に一体とさへいへば、その小僧時代より滑稽頓智の權化のやうに誰にでも知られて居る。實際彼れは圓轉滑脱不羈奔放、些の拘束もなく、意表外に飛び抜けた道化た事もやれば、細かい戒法などをも顧みずに、酒も飲み肉も喰ひ煙房にも出入するといふ風であつた。ごゐて、世人から活如來活菩薩と崇められた、といふことは如何にも不思議なほど彼れの人格に偉いところがあつたことを證明するものである。

こゝには一体和尚の行實を記すのでない。そんな偉い人格の一体を生んだ母のことを考へて見たいのである。一体の歌として傳へられて居る有名なものの中に

女をば法の御藏といふぞげに

釋迦も達磨もひよい／＼と生じ

といふのがある。活如来活菩薩天下の老和尚一休禪師も矢張り御自身仰せの通り人間の女からひよい／＼と生んで貰つたものである。その女、即ちその母が一體如何なる人であつたらう。

我々娑婆の縁つき無爲の都に赴き候。御身よき出家に成り給ひ、佛性の見をみさき、其の眼より吾々地獄に墮るかおちざるか、不斷添ふか添はざるかを見給ふべし。釋迦達磨をも奴となし給ふほどの人に成り給ひ候はゞ、俗にても苦しからず候。佛四十九年説法し給ひ、遂に一字不説とのたまひし上は、我と見、我と證るが肝要に候。何事も莫妄想。あなかしこ。

九月上旬

不生不死身

千菊丸殿

かへすくも方便の説をのみ守る人は、糞虫に同じ事に候。八萬の聖教をそらに讀みても、佛性の見をみがはずんば、此文のほどの事も解し難かるべし。

これとても假初ならぬ分れては

かたみとも見よ水くきのあと

これは一休和尚の母が、臨終の際に一休に宛て、遺した手紙である、と或る書に載せられ、よほど廣く世人にも知られて居るものである。宛名が「千菊丸殿」とあるよに見れば、一休の母は一休がまだ受戒得度せぬ沙彌小僧の頃に早く亡くなつたものとせねばならない。而して之れに依つて見れば一休の母は、よほど深く禪乘に體達し、明かに心眼を開いた立派な人、天下の老和尚活佛と稱せられた一休和尚の母として、如何にも相應はしい男優りの偉い婦人であつたと首肯せねばならない。實にこの母にしてこの子あり、一休和尚に取つては、肉體的に恩愛深き生育の悲母であると同時に、精神的にも佛法親教の大善知識であつたといはねばならない。

ところが、それは或る書に載せられた一説に過ぎなくて、信ぜらるべき事實ではない。一休和尚に取つて恩愛深き生育の悲母であつたといふことは勿論否定することは出来ないが、佛道の善知識であつたといふ一事は反對の關係で、一休既に本来の面目坊に撞着して活機縦横の境界を得てのち、その悲母をして同じく亦直指端的の禪道に入れ一超して安樂世界に遊戯せしめようと懇々婆説した、といふのが事實として信ずべきものらしい。従つて一休和尚の母は、よほど長壽して悟道の一休から慰められ老後を樂しく送つたもので、まだ沙彌小僧であつた一休を激勵すべく彼の手紙を遺して夙く身まかつた、といふのは當然後人虚構のものと斷ぜられねばならないわけである。實をいへば一休の母に關した事蹟は甚だ朦朧としてその終始は明かに知ることが出来ない。が、大體綜合して次ぎのやうに攷察することが出来る。

一休の母は藤原氏、南朝公卿の胤で、星の眼眸月の眉、花なればまた蕾のやうやく笑み初むる比、召されて山櫻匂ふ吉野の行宮に入り、後龜山帝の殊寵を蒙つたが、間

もなく和議成つて南北御合體の後、頼りなき女の身の悲しさにまた京の宮に入つて二度の奉仕をせねばならぬことになつた。

優れた容色と才能とを有つた藤原氏は、やがて後小松帝の寵愛を一身に鐘め、殊に御胤をさへ宿し奉つて、身はまさに金殿玉樓の奥深く榮華を極むる幸運の人であるべきであつた。ところが、さらでだに、爲めに顔色なかつたおほくの後宮の嫉妬は毒刃よりも恐るべき讒誣となつて現はれた。藤原氏はつひにたゞならぬ重き身を、あられない濡衣に掩はれて、限りなき怨みを呑みつゝ退いて洛西の草深き陋屋に佗住ひしなればならなくなつた。その陋屋でやがて呱呱の聲を擧げたのが即ち千菊丸後年の一休和尚である。

世が世なればやんごとなき皇子として時めくべき一休母子も、罪なうして罪の人たる日蔭ものゝ悲境に在つては奈何ともすべきやうなく、一休僅かに六歳のとき、京の安國寺像外鑑和尚の侍童となつて、世間的の頼み難き榮華を外に、超然として出世間

界に撞き進むべき第一歩を踏み出した。

一休幼年時代の奇想天外的な諸種の頓智滑稽が、舌く人口に膾炙せられて居るが、それらの多くは後人の假托らしいとするも、たしかに天資慧敏で、一を聞いて十を知る奇才であつた。十三歳にして東山慕詰公に就いて詩を學び、天賦の才能は夙くその方面で人を驚歎せしむるものがあつた。が一休の素志は世間的の詩人文藝を以て任ずるものでなくて、更に絶大なる盡大地是れ一卷の經。乾坤直に文彩淋漓と視る禪の修證に在つた。

一休十七歳よりは西金寺爲謙翁に就いて參禪した。爲謙は學徳一世に高い名僧であつた。師資肝膽想照して清貧枯淡の生活に甘んじて佛道行持に餘念がなかつた。一休が爲謙から受けた感化は大なるものであつたが、未だ契悟を得ないうちに師はたゞ一人の資たる一休を遺して入寂した。一休は時に二十一歳であつた。その生活の惨めさは師の葬式を營むことすら出来兼ねたほどであつたといはれて居る。

唯一の頼みにしてゐた師に死別れた一休は一時途方に暮れて、悄然として母の陋屋に歸つて往つた。流轉幻滅極まりなき運命に虐げられた薄幸な母子は相擁して悲歎の涙に暮れるより外なかつた。しかし、いつまでさうしてゐらるべきでないので、一休は母と別れを惜みつゝ、力なげに再び陋居を後にした。

母に別れを告げて門出はしたものの、さしてゆくへは何處といふ當てもなかつた。兎に角近州路に出たが囊中一錢の金さへなく、飢ゑては人の情けに僅かに露命を繋いでゆくといふ状態、いよ／＼窮してこの上はたゞ神佛に祈誓を籠めて慈悲光明に接するより他ないと決心し、石山觀音に七日の斷食をして參籠したのはこの時である。満願の曉に於いて、心地は依然として開明せず、行く手はいよ／＼ぬば玉の關であるのにつひに絶望して、茫々たる湖水面に向つて一思ひに身を躍らして跳び込まうとした刹那、急ぎ後から抱き止めた者があつた。それは母が彼れの悄然として門出した前途を心元なく案じて一人の男に頼んでその萬一を護らせたのであつた。

一休は使者の男の慰めと諫めと勧めによつて再び母の許に引つ返した。さうして痛ましく傷き疲れた心身を暫く安養してゐた。そのうち不斗、堅田の華叟和尚の道譽を風聞に知つた。これこそ眞のわが師とすべき人なれ、と一休は心勇んで母にも志を告げた、母も悦んだ。さうしていろ／＼と論したり勵ましたりして彼れの志をいよく金鐵にし、彼れの前途を祝福して出立せしめた。

華叟は、家風峻嚴で學人を接するの手段辛辣を極めた。一休はその門を敵いて教を請うたが無下に叱り斥けられた。強き決心を以て出て來た一休は何で再應も三應も母の許に引き返されよう。彼は死を決して飽くまでこの善知識の教を請はうと、門前に跣座してそこを動かさなかつた。二日経つても三日経つても動かさなかつた。華叟偶々檀越の齋に赴くので門を出て、「此の乞食坊主奴またこんな所に居るか、置かぬと言つたら置くことはならぬ。早々と立ち去れ」と口汚く罵つて出て行つた。檀越から歸つて見ると矢張り一休は動かさぬ。「あのれ仕太い奴だ、退かなければ退くやうにして

退かせる」と言ひながら、折りから寒空なのに冷水を一休の頭から浴せかけた。而も一休は動かさぬこと石地蔵の如く、「元より死を決して御願ひするのでござれば、如何様にされましても和尚の教を受けぬうちは立ち去りませぬ。このまゝ和尚の手に死ぬるようなれば本望でござる」と言つた。求道の熱誠はつひに和尚の感納するところとなつた。

吹毛太阿の劍も幾度か熱し幾びか冷し淬礪されて始めて鍛へ上げられるのである。一休は此熱烈な道心を以て寢食を忘れて精進辨道した。そして遂に素志を遂げ得た。かの「本来の面目坊が立姿一目見しより戀とこそなれ」の歌を詠んで一心不亂に工夫してゐた逸事もこの華叟會下での苦修を語るものである。斯うした慘澹たる前半生の修行はつひに彼れが如き圓轉滑脱天空海潤の後半生を生み出したのである。彼の飄々な洒落な言行のうちに、必ず何ものか眞面目な眞理を包蔵してゐるのは、その湧き出づべき斯うした源泉があつたからである。彼が不羈奔放を恣にしなから天下の老

和尚と自稱し、活如来活菩薩と世に讃へられた所以もこゝに存するのである。

あら樂や虚空を家と住みなして

心にかゝる造作もなし

本來もなき古の我なれば

死にゆく方も何かもなし

作り置く罪が須彌ほどあるならば

閻魔の帳につけ所なし

釋迦といふいたづらものが世に出て、

多くの人を迷はするかな

世の中は食うて稼いで寝て起きて

さてその後は死ぬるばかりぞ

心とは如何なるものを云ふやらむ

すみゑに晝さし松風の音

物事に執着せざる心こそ

無相無心の無住なりけれ

など、みな一休和尚獨特の面目が窺はれるではないか。弱々しい悲觀的な厭世的な彼れの修養時代は、廓然として一たび本地の風光に接してより、一變して斯の三界獨歩自由自在の傳道時代に入つたのである。洒々落落々々無碍自在の活機用を以て道俗を化導するに至つた一休その人の胸次は無限の慶快を以て充たされたことは勿論、またその母なる人の満悦も如何ばかりであつたらう。

奔放洒落な一休和尚にも、實に彼が如き慘澹たる修養時代があつたことを知らねばならないと同時に、その時代に於いて彼れの背景にやさしい温い情を漲らして蔭になり日向になり常に愛護を加へてゐた一人の悲母のあつたことを看過することが出来なう。一休の後半生あるは、一休その人の天稟なくんば元より望まれないところではある

が、亦母藤原氏の間、或る影響を興へた力の決して尠少でなかつたことを注意せねばならないのである。僅かに六歳にして出家した、といふ事實は、いふ迄もなく母の意志に出でたものに違ひない。親一人子一人の恩愛の情を割いて夙く愛見を出家せしめ、天晴天下の高僧知識になれかしと、常に蔭ながら庇護を怠らなかつた一休の母は、世の人の子の母として充分な慈愛に充ちた女らしい、母らしい、優しい人であつたと共に、鋭い理知の力ある、どこか凛としたところのある、確かりした女でもあつたと推測することが出来るではないか。蓋し、薄幸な運命に沈淪した頼りない女の、敬虔な宗教的信念に驅られるに至つたのは怪むに足らない。が、前にも言つた通り、一書に載せられたやうな「釋迦達磨も奴となし……」といふ自力聖道の法門は、轉變の悲運に傷ましく呵まれた彼女の心情には、迎るべく餘りに峻峻の道であつた。で、彼女はその子をば禪家に投ずることを擇んだが、自分は専念に彌陀の本願に縋る他力念佛の法門に入つて安心の道を求め、日夜佛を禮拜し、唱名を懈らなかつた。

それが一休既に轉迷開悟し、安樂の法門を體得して、從來の上求菩提の修行が、一轉して下化衆生の行願となつて現るゝに至り、何者よりも先づ、海よりも深き母の恩に報答し、佛教の理想たる大孝を盡すべく、自分の得た法味に同じく母をも飽かしめたく思つたのは元よりそのところである。一休自ら

佛とて外に求むるこゝろこそ

迷ひの中の迷ひなりけれ

わが心そのまゝ佛いきほとけ

波をはなれて水のあらばや

などと、その信條を言ひ顯はして居る如く、彼れの眼からは、極樂往生を欣ぶごときは、佛法中の間接方便門とも見られ、母の念佛三昧が慊らず思はれ、母がそれに依つて充分安心を得てゐない境界が憫れでならなかつたのである。で彼は「水かどみ」「假名法語」を書いて母に送り、即身成佛の禪の安心を切りに勧めた。何れも一休獨

特の通俗平易な文體を以て深遠な禪乘を説いたもので、それが母の爲めにしたものだけに、親切丁寧な至情が言外に溢れてゐるやうに見られる。

御身としても早暮近くならせ給へば、何のお望み候はんや。殊更地獄の話をもしろしめされ候へば、往く水の如くにお心を持たせ給ひて、御胸の中何ごとも御望みなく候へば、世尊一休の御身にて世座あるべく候……

と説いては、禪の極致とする「應無所住而生其心」の理を明し、更に

母にて候もの、事思ひ出しまゐらせ候へば、一しほ其方へまゐりたくこそ候へ。

はや其様の御覺悟も大安樂の道に近づき候へば、めでたく満足いたし候。

と言ふに至つては滑稽洒落の親玉を以て後世より見られる一休和尚が、如何に眞面目な腹底を以て佛子が慈母に對する熱愛を濺いでゐたかを窺ふに充分なものである。

要するに、一休の母は、かの遺言の手紙だといふものに傳へられたやうな、夙に禪要を得て直指超入の自力門に安心を得てゐた女丈夫であつたとは信じられないが、一

休悟道の後は、罪惡深重とせられた女人の身を以て現身に成佛することを得る聖道の玄門に導かれ、その子を善知識として、世間的に薄幸であつた境遇も、後には限りなき悦樂を感じる精神生活に入つて、老後を心安げく送ることを得たものであつたらしい。即ち亦禪味に浴した女流の一人であることを失はなひと謂へるであらう。
一休母子の生涯は、斯うして前後互に善知識となつて同じく無上道に遊戯したものであつた。

何事もいふべきことはなかりけり

問はて答ふる松かぜの音

——澤水和尙

劫火洞然

慧春尼

雪峰と玄沙の語——道を知らざる者と道に囚はれたる者——悟は徹底を要す——優れた美人——美貌を煖いて出家す——遺傳か感化か——人生の悲惨事——煩惱の犬——譚機か狂暴か——目健連と蓮華色——紅篋裡の入定——古人の生死透脱——石霜の第一座——禪の真乘と生死——婆子燒庵の話——無心禪——極端な空——管野管子と慧春——可惜乎

雪峰義存禪師があるとき垂示していつた。「飯籬邊に坐して餓死するの漢、河に臨んで渴死するの漢」

玄沙師備禪師はこれを次のやうに言ひ直した。「飯籬裡に坐して餓死するの漢、水裡に没頭して渴死するの漢」

餓死するの漢と渴死するの漢と、その同じいこと全く同じ言ひ方であるが、飯籬邊と飯籬裡と、河に臨むと水裡に没頭すると、その異なること全く異なるの言句、これを五十歩百歩と看過するわけにはゆかない。

大道本來四通八達、邇く脚痕下に横はる、と知らずに、彼方此方と迷ひに迷ひを踐み添へて茫茫五里霧の中に彷徨うて居る凡愚は、飯籬の近邊に坐わつてゐながら餓死するやうなもの、河に臨んでゐながら渴死するやうなものではあるまいか。また「事を執するはもと是れ迷、理に合ふもまた悟にあらず」といふ、道を得たといつてその道に拘着して居る者は恰ど飯籬の裡に這入つてゐながら餓死するやうなもの、水の中に頭を突つ込んでゐながら渴死するやうなものではあるまいか。

餓ゑたる者、渴したる者は、飯を食つてこそ、水を飲んでこそ。飽満が出来る、悦が得られる。飯や水の所在をも知らないものは元より飢渴を免れない。が、その所在を知るとも直に飯そのものを食ひ水そのものを飲むのでなければ、初めからその所在を知らずにゐる者と同様に飢渴に仆れなければならぬ。

禪は、餓ゑたる者、渴したる者に直に飯を食ひ水を飲んで飽満を得る法を教ふるものである。だから道を得た、悟を開いたといふその道その悟は徹底自分のものになら

ねばならない。生悟や悟り損つた悟はその弊却つて不悟未悟よりも慧しいものがある。高嶺の月を賞せんとならば、どこの絶頂まで登り切らなければならぬ。中途から引返す位なら、また半腹に腰かけて居る位なら、それはほんの草臥れさうけて、寧ろ最初から一步を進めざるの安きに若くはない。若しそれが、分け登る麓の路を、とんでもない方角違ひに突き進み、底知れぬ谷間に陥ち込んでしまふやうなのに至つては、たゞ憫むべき極みである。

女流參禪の話題の中で最も著名な一として傳へられて居る尼慧春の行實の如きはこゝに好箇の評論題目となるべきものと思ふ。

慧春は相模の糟谷で藤原氏の女と生れた。優れた美人で蛾眉織月の容色人をして恍惚たらしむるものがあつた。にも拘らず、花の青春、女一生の盛りをば空しく過して三十歳を超えてしまつた。ある日、突如小田原最乗寺に了菴慧明を訪うて、得度を受けて出家したいと切に請ひ求めた。理由は、俗に處するの意なしといふのであつた。

了菴は慧春の兄で、最乗寺開山たる曹洞の碩徳である。妹のこの唐突な志望は兄を少からず驚かした。兄は容易く容さなかつた。聲を勵まして「出家は大丈夫の事、女子供に立て通されるものでない。殊にこの清淨海衆の中に女人を引き入れて法を瀆すやうなことがあつてはならぬ。うら若い女の身ぞらで由ない望みは起さぬものぢや。歸れ、歸れ、女人にはおのづから女人の道がある。在家には在家の佛法がある」と言下に叱り斥けた。彼女は黙つて聞いてゐた。そして靜かに兄の前を退いた。と、忽ち呀つと唯ならぬ叫びが洩れ聞えた。彼女は鐵火箸を眞赤に燬いてその美しい顔に縦横に押し當てたのである。「兄さんこれでも出家が立て通されませぬか」と、慘々しく打ち變つた顔を出したとき、了菴もその石のやうな堅い決心に負けて、とう／＼鬚々の黒髪に剃刀を當てた。

鎌倉の初期に於て初めてその種子を支那から移植した日本の禪は、漸次根幹を培養せられ、鎌倉の中葉より室町時代にかけて日に枝葉鬱茂し、臨濟派の方は所謂五山十

刹の門風翕然として天下に煽揚された。曹洞の一派は、高祖道元禪師が越前永平の谷深く一個半個を接するの家風を開いて後、四世の法孫瑩山紹瑾和尚の頃に至つて大に隆運に赴いた。瑩山和尚は洞門の太祖と仰がれて居る高德で、後醍醐天皇の十種疑問に奉答して叡感に預り、その開創地たる能登の總持寺を以て「日本曹洞出世の本山」とする勅額並びに紫衣を賜はつた。その門下には高僧碩徳雨後の竹孫のごとく頭角を現はして四方に弘法し、これより洞門の法燈は遂に津々浦々にその輝きを増すに至つた。了菴慧明の師は通玄寂靈、通玄は瑩山和尚の神足たる峨山紹碩の嗣である。

慧春は斯うした禪風擧颯の時代に生れ、而も一代の高德を兄としてゐた。その周圍にか、その遺傳にか、おのづから禪的感化を受けて求道の念の切なるものあるに至つたのだ、といはゞその發心出家も怪むに足らないわけである。殊にまた花顏柳眉を糞土にして法の爲めに不惜身命の熱烈な心情を示した一事は、かの夜もすがら腰を埋むる大雪に立ち盡して法を求め、達磨の一喝に逢うて直に利刀を執つて左の臂を斷つた

慧可大師の勝蹟にも比して歎稱するに値するとも謂はれないことはない。

併しながら尋常の人情を以て考へるならば、どうも彼れが如きは不自然である。變態である。優れた美人で、漲る青春の血潮未だ涸れたといふでもない。熱い情味の尙ほ溢るゝ若い女性で、而して別に出家せねばならない事情が表面あつたとも聞かない、それが特色も本能も、女としての天與の特權、それら總べてを芥塵にして顧みなかつたといふのは、殆ど常情では解釋が出来ない。深山櫻のひとり匂ひ出で、ひとり散るやうに、岩間の躑躅の寂しく笑み初めていつか空しく凋落するやうに、可情美貌の世に時めくこともなく、處女として徒に三十年の盛を送つてしまつたといふには、或は其の間に同情すべき秘密の心理が懷かれてあつたのではあるまいか。人には言へない若い女の純一な胸の流れに、波うつ悲惨な渦巻が隠れて湧き立つたやうなことが全然なかつたであらうか。彼れの出家の動機に關して、そんな抹香以外の香を嗅ぎ出さうとするには絶對に許されないのであつたらうか。常情を以てたゞ表面からいふな

らば、どうしても人生の悲惨事でなければならぬ。兎に角、出家の第一歩に於いて常情の付度すべからざるものゝあつた彼女は、圓頂にして方袍を着けた後の行實も亦常軌を以て律することの出来ないことが多くあつた。焼火箸は慘酷の跡を顔貌に印したけれども、縁の髪は恩愛の根をふつつり断つたけれども、その涼しい瞳に、その優しい唇に、その雪のやうな肌、どこにか尙ほ人を動かすに足る美の名残りが消え失せなかつた。爲めに煩惱の犬の狂ひ出した同參の一人があつて、心のたけを盡した長文を密と法衣の袖に投げ入れた。慧春は披いて見て微笑んだ。そして直に返事を與へた。「いと易いことである。但し互に僧の身であれば世間尋常の男女が逢瀬を學ぶこともならぬ。慮ふに私のそなたと逢はうと思ふ所は甚だ險難な場所なので、そなたは、恐らく約束通り來て思ひを遂げ得なからう」といふのであつた。相手の僧は飛び立つばかり悦んだ。「此の願ひ許されるとあらば、たとひ熱湯猛火の中であらうとも辭する所でない。まして其他の險難何ものゝ恐るべき

があらう」と只管その期を待ち焦れてゐた。

了菴老僧 上堂して合山の大眾は法堂に雲集した。一會水を打つたやうに静まり、敬虔な法の尊さが漂うてゐた。と、忽ち衆中より躍り出たものがあつた。袈裟を外づし法衣を脱ぎ、赤裸々で糸一筋身に着けてゐない。それは慧春であつた。彼女はそこで前の戀文の主を指摘して「豫ての約束は負かぬ、サア今此處で……」と招くのであつた。莊嚴に閉された氣は壞られた。師も驚いた。衆も呆氣に取られた。呼ばれた僧は跳び上がつて狼狽へた。そして脱兎のやうに山を下りて竄げ去つた。

この事實を「師が情境を透脱すること多くはこの類なり」と古い禪者が稱讚して居る。果して稱讚に價するであらうか。如何にも、これは、内に情緒の纏縛あり、眼に外境を反映する者には到底眞似も出来ない振舞である。が、人の容易に出来ない事を思ひ切つてやつて退けたといふだけで、直に豪いとは褒められまい。これを、我相人相を泯絶し男女の差別妄執をも打破するといふ禪の向上一路に立つて、破戒無慙の

賣僧を懲治した活手段に外ならぬ、といはゞ或はその禪機の峭峻を稱するに足るともいへないことはない。併しながら、それにしても、外に尙ほ擇ぶべき形式は幾らもあらう。縦し法堂上大衆環視の裡を好適の場所とするに於ては、眞赤裸で躍り出すといふのは何らの心行か。殊に五家七宗の中でも綿密渾厚を以て特色とする曹洞門下の參徒として、殊にまた卒暴奇激を痛く戒められた承大師の流れを汲む法孫として、彼女が如きは、實に何らの狂状であるか、實に何らの醜態であるか。

佛の十大弟子の中で目犍蓮尊者は神通第一の大阿羅漢である。あるとき蓮華色といふ遊女が、あらうことかこの尊者の端嚴の相好に懸想して隙を見て言ひ寄つた。蓮華色は容色すぐれて多くの男を手玉に取つては佚樂に耽つてゐる強かな淫女であつた。言ひ寄られた尊者はたゞ女を憫む慈悲の念に溢れた。「女よ、汚らはしき者よ、我に近いてはならぬ。見よ、汝の不淨の身を見よ、脂粉を施して自ら美さを矜るとも、そは錦の袋に糞を裏んだも同然ぢや。皮一重の下を見よ。醜い骨と骨とは絡み合ひ、

蛇のやうな筋脈は縫れ合ひ、血液はその間に流れ、九つの孔からは絶えず涕唾涙や糞尿が流れ出る。みづからその身の不淨を知らずに徒に表面を飾り、己と己の姿に迷ひ厭ふべきを厭はず執すべからざるを執して居るあるかさよ。たとへば老いたる大象が泥に溺れて自分の重みで自分を亡すやうなものぢや」と諄々として不淨觀を説いて救ひの綱を投げ與へた。泥の深みに陥つて身も心も汚れて眼も眩んでゐた蓮華色も、このとき夢から覺めたやうに眞の我にかへり、投げ與へられた救ひの綱に取り纏つた。彼女はその後より一切を懺悔して佛弟子となり、後には比丘尼中神通第一の稱を博するに至つた。佛心とは大慈悲心である。佛弟子たるものは佛心を以て己の心としなければならぬ。慧春にして若し目犍蓮尊者の大慈悲心を學んだならば、あの場合必ず他に擇ぶべき道があつたてはあるまいか。

彼女が没常軌は最後に於いて亦その掉尾の一幕を演出して居る。
ある日、最乗寺山門前の大磐石の上に薪が山と積み上げられた。慧春は自らその周

圍に火をつけてその上に座し火焰裡に入定するといふのである。稀有の道力を觀むものと來り集まる者堵を成し、痛ましが聲、讚歎する囁きが交々洩れる。魔の吐く毒氣のやうに濛々として白煙が横はる、と見る間に煙を朱に染めて紅焰凄まじく立ちのぼつた。兄の了菴は傍近く進んで聲を掛けた。「熱いか、熱いか」活不動のやうな恐ろしい相形となつて猛火に裹まれながら黙として苦惱の一聲もあげず、微搖さへしなかつた端坐の人の喉を破つて底力のある異様の叫びが迸り出た。「熱いか冷いか生道心には解らぬ。煙に咽んだか、火が焚き盡したか、叫びは絶えて再び聞えず、爆々と撥ねる火の音、ジッと燻き爛れる血肉の嗅ひのみが後に残つて鬼氣凄愴として人を襲ふのであつた。

生死を自由にするといふことは、道を得た納僧家では常茶飯事であるといはれて居る。達磨は端然として生けるが如く坐脱し、三祖僧燦は大樹の下に合掌したまゝ、立亡し、鄧隱峰の如きは更に奇抜に倒立したまゝで遷化して居るし、華亭の船子和尙は法嗣夾山を得た時、自ら舟を覆して水中に入寂した。火中に滅を取つた例なら、霍山の景通が凄まじい紅燄裡に入定して居る。日本でも——慧春の時よりは降つた戦國時代ではあるが——甲州惠林寺の快川禪師が織田信長の爲めに大衆と共に山門樓上に逐ひ上げられ下から火をつけられた時に「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と末期の一轉語を下して安詳として身を灰燼に歸した話は有名である。

これらはいづれも祖席の英傑、正傳の宗師家がその神通妙用遊戯三昧を示した踪で、固より知解情量を以てしては其の眞消息を窺ひ知ることが出来ないとせられて居る。而して慧春もまた火定に入つて人を驚動せしめた。それが果してこれら諸祖の三昧と同じものであつたらうか。生死透脱といふことは禪門の一大事とするところである、と云つてそれだけが禪の眞乗であると心得ては大なる間違である。眞乗に體達した諸祖の生死を自由にした事跡を讚歎すればとて、同時に、生死を自由にした者の行履を以て直に眞乘體達の人だと稱揚するわけにはゆかない。次のやうな話頭もある。

石霜の慶諸禪師が遷化したとき、多くの參徒は堂中の第一座を推して住持を嗣がしめようとした。時に九峰の道虔禪師が侍者であつたが、ひとり衆議を排して「先づ第一座が先師の眞意を領得して居るかどうかを確かめた上でなければならぬ」と言ひ張つた。そして次ぎの問題を提起した。「古廟の香爐一條の白練といふが如きは之を如何に會するか」と、第一座は即座に應へた。「是れ唯一色邊の事を明かせる語のみ」九峰は言下に否定した。「果然先師の眞意は未だ會して居らぬ」第一座は起て香を炷いて誓つた。「われ若し先師の道を得て居るならば、此の香の煙と共に坐脱することが出来るであらう」と、言ひ訖るか訖らないうちに香の煙は一條の白い糸のやうにすゝくと立ちのぼつて、うつすら漂ふと見る間に消え失せた。その瞬間、第一座は端坐不動のまま泊然として脱脱してゐた。大衆はいみじき悟道の力よと感歎した。けれども九峰は第一座の背を拊て、言つた。「坐脱立亡は無きにしもあらず、首座が先師の意を會することは即ち夢にだも未だし」と、つひに斷じて許さなかつた。

坐脱立亡が自由に出來るといふのは非常な定力といはねばなるまい。而も正師家の道眼から觀れば未だ道に於いて徹底せざるものがあるかと否定せられた。慧春は果して石霜の第一座以上の境界に到り得てゐたであらうか。彼れが火定は果してこの坐脱に對して越格一段のものであつたらうか。若し九峰の道虔禪師をして最乗寺門頭に在らしめ、親しく彼の火定を點檢せしめたなら何と引導を渡されたであらう。

一人の老婆が或る禪僧に歸依して二十年一日の如く供養してゐた。常に美しい少女をして給侍せしめてゐたが、ある日少女に教へて靜坐の僧をその纖嬌な手で抱擁せしめて「正當恁麼の時如何」と言はした。僧は平氣なもので「枯木寒巖に倚る、三冬暖氣なし」と言つた。すると老婆は「二十年來この俗漢を供養す」と云つて直にその僧を趕ひ出し、その菴を焼き拂つてしまつた。婆子燒菴の話と云つて有名な公案である。客觀の囚はれから解脱して事々物々の差別につきまはされてゐる心を一點に收拾し、所謂明鏡止水の如く靜澄ならしむることは、吾々の散亂粗動の精神を修養するの要訣

であつて、空理の法門も之れが爲めに開かれて居るのである。併しながら單空を固執して更に眞空にして妙有なる眞諦を悟らねば、其の修養は何等活きた作用をも爲さぬ。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」といふまでの修養は固より容易ではない。が、それだけでは本佛金佛石佛も同然で、これを枯木禪、無心禪として斥けられるのである。但しこの語を絶叫した快川禪師の場合は少しく考へなければなるまい。禪師が日常枯木禪無心禪を鼓吹してゐたとは思はれない。あの悽慘な迫害に遭遇した非常の際に於いて、たゞ以て禪師が大安心の一面を伺ふに足るものであるし、またあの場合それが多くの未熟な參徒の爲めに示す末期の一句として最も親切なものであつたとも謂はれるのではあるまいか。

慧春の場合は快川禪師のそれとは全然趣が異ふ。彼女は平地に波瀾を起して自ら焦熱地獄の慘狀を現出した、そして「熱いか冷いか生道心には解らぬ」とひとり力んだのである。さうだ、慧春には熱いも冷いもすべて空であつたのである。彼女の眼には

男も女もなかつた。戀も情もなかつた。親子兄弟近隣朋友もなかつた。情境を透脱したといふ、眞に情も空、境も空であつた。蒼天も空、大地も空、佛も空、法も空、その身も空、心も空、一切が空、その空も亦空なれと猛火に投じて空盡に歸した。その火ももとより空、煙もまた空、冷熱もなければ苦惱もある筈がない。極端に何物もない。痛快に空なのである、滅茶に空なのである、或は狂暴に空なのである。

われ／＼は快川禪師の「心頭を滅却すれば火もまた涼し」の語が、語そのものは所謂無心禪の立場にあるやうな気がしながら、それが或る場合に大にわれ／＼の修養に資するべきものがあると深く感じられるが、慧春の冷熱を擧げて灰燼にし去つた末期の叫びを聞くとき、どうしてもそんな床しい感じを惹くことが出来ない。

私のかの管野菅子が死刑に處せられる斷末間に「死後などはどうでもかまはない。燼いて粉にして吹き飛ばして了つてもらへばよい」と捨言葉を遺したと聞いたとき、その狂暴な放言に一種の不快を覺えると同時に慘ましい憫みの情がそゞろに起つた。

國家の觀念もない、國民の思想もない菅子には名も要らぬ、身も心も要らぬ、焼いて粉にして吹き飛ばして何も残らぬ空に歸すればよかつたのである。その理智に勝つた女性であつたこと、そしてその狂熱的な、激越な、突拍子もない言動から末期の一語まで、たとへそれが方面を異にしてゐたとはいへ、菅子と慧春とにどこか似たやうな色彩が認められるといふやうな感じがするのはどういふわけだらう。

勿論、その修養、その信仰に於いて慧春の人格を菅子に比するのは甚しい見當違ひである。慧春が出家後の參禪辨道は精進專一で他の同參の男僧達も舌を卷いたといふし、諸方飽參の禪和子も往々その峭峻な禪機に敗闕を容れたと傳へられて居るし、また彼れが最乗寺山下に攝取庵を結んで盛に往來の人を接待したといふ慈善的な行蹟も稱せられて居る。彼女が了菴會下に在つて幾重の關を透得した有力の禪尼であつたことは否定することが出来ない。

が、可惜乎、九佞の功を一簣に少くものであつたではあるまいか。要するに彼女を

以て禪の眞乘に徹底的に體達したものであつたと首肯することは斷じて出来ない。

こんどは自然の女はあつたか
矢張り菅子と同く、サーも異ならぬ

大聖は生死を心に任す、生死を身に任す、生死を道に任す、生死を生死に任す。この宗旨顯はるゝ古今の時にあらずと雖も、行佛の威儀忽爾として行盡するなり。

— 承陽大師

世法佛法 新松院尼

武田信玄の女——婚約と破談——武士道氣質——無垢の蕾の凋落——武田氏の滅亡——自負
心と志操——徳川家康の殊遇——信玄と尼公——不退轉の道心——ト山和尚の法を傳ふ——
臨終の遺言——一百年忌

東京府下八王寺に信松院といふ禪寺がある。信松院尼公の開基するところ、尼公は實に武田信玄の第六女である、名は阿松といつた。始め別に新殿を作つてそこに居らしめたので、呼んで新館君といつた。生れて姿色心操雙艶の姫君で、父信玄の寵愛も一入なれば人々の敬愛も深かつた。まだ八歳のとき、織田信長の長子信忠との婚約を父同志が結んだ。しかし昨日の味方も今日の敵となる定まりなき戦國の慣ひとして、殊に近取遠交の方略を立て、それが爲めには近親族姻をも犠牲として顧みなかつた信長のこととして、其勢力を漸次中原に展ぶる比には、武田氏とは相絶つて互に敵として對抗するに至つた。従つて松姫と信忠との婚約も自然破談になつた。時に姫は十二歳

であつたが。その翌年父の信玄が病歿した。母は油川氏であつたが、それより先き既にこの世の人でなかつた。姫は斯うして十三歳のとき全く父母なき寥しい身となつたのである。

既に母を喪し、また父に分れた松姫は、兄の仁科信盛に引き取られることになつた。蕾の花は日に色香の増すばかりであつたが、姫は、世の小娘の、狂へる蝶のやうに、噂づる小鳥のやうに、その人生の春を樂しげに燥いで暮す態は毫もなく、静かな、寂しげな、慎ましやかな、丁度若くして夫に別れた婦のやうな態度であつた。近親の人々は深く憐れに思つて、相當な武將を誰彼と選んで婚嫁するやうにと頻りに勧めるのであつたが、「自分はたとひ、未だ醜典は擧げずとも、既に一旦織田殿と婚約を結んだものである、縁薄うして早く破談になつたのは已むを得ぬ、みな天命と諦めて忍ばねばならぬ」と、武士道氣質の二夫に見えざる志操を守つていつも固く辭するのであつた。そしてまた、「亡き父母の冥福を祈らうとの念も久しく懐いてゐるので世俗人事

には開り度くないから」と言つて遂に丈なす美髪に惜しげもなく剃刀を當て、尼道心の姿となり、殿に葷肉を絶ち節を持して日夜佛に事へる身となつた。とさに芳紀まさに十八歳、無垢の蕾は斯うして花咲く春に逢ふこともなくて凋落したのである。

天正二十二年、織田、徳川兩家が力を協せて武田勝頼を攻めた。剛愎で宿將たちの言を用ひなかつた勝頼は手痛く打ち破られて、遂に天目山で亡ぼされてしまつた。仁科信盛は高任城に籠つたのであるが、城陥つて亦戦死した。松姫の尼公はこゝに全く頼る方なき悲境に陥つたが、心雄々しき尼公は季の妹やその他の幼族を扶けて栗原に遁れ、海東寺の一室に身を隠すことにした。武田氏の遺臣のうちで潜かに衣食を送るものがあつたので、しばらくは安穩であつたが、のちそれが織田方の探知するところとなつて、贈り物は途中で雑兵等に奪はれ、栗原村も亦屢劫掠されるようになった。そこで尼公は更に遁れて武州の地に入り、安下山の隣境の人里離れた處を撰んで隠棲することにした。

のちには其の隠棲も追々世の知るところとなつたが別に迫害を受くるやうなことはなかつた。世の諸將士のうちには、尼公が名家の姫であること、才色優れた、まだうら若い美人であることを相傳へて、得て妻妾にし度いと心を焦がす誰彼も少くなかつたが、尼公はこれを聞く毎に、「自分は既に一身の微を以て風塵の外に處ること年久しく、今更この殘骸を以て世俗榮枯の裡に關はることは素志に反する。且つ嫡々の貴族に流れを汲む者、一身盛衰の故を以て末族賤流に配して失節の汚名を後世に貽すに忍びない」と、固く誓つてみな峻拒した。英雄信玄の女として、堅固な志操と、強い自負心とが、これらの言行に充分認められるではないか。

斯くてその後みづから山邑の中に地を相して第舎を造營し、一人の姨母と二三の孤幼と共にそこに住まつてゐた。別に蓄へがあるでもなく、手に生業を有つて居るでもない姫御前の、忽ち貧苦に迫つて一時は實に慘めな生活をしなければならなかつた。が、尼公はみづから紡績の手業などして、かにかくとして幼族を育てゝゐた。のち舊臣

の窪田、石坂、萩原、志村、原、河野、中村、山本などいふ人々が追々甲州から武州へ移り住むに及んで、それらの人々によつて傾き壊れた屋舎も改修せられ、衣食の類も貢がれて些の不自由もなきを得るようになった。

天下の形勢は次第に移つていつて豊臣秀吉の一統となり、徳川家康が關八州の主となつて武藏の江戸に居城を定むる頃に至つて、横田甚五郎、成瀬吉兵衛などの具申によつて、尼公の心操身行は家康の深き感賞を蒙り、態々慰問の使ひをさへ受けた。而して家康はまた、かの尼公の季妹を容れて侍妾とした。其の腹に生れたのが萬千代でのちに武田姓を嗣がしめて七郎信吉と名乗らせた。

武田信玄は、かの有名な惠林寺の快川禪師に參禪して悟道を得たと傳へられて居るが、その聰明なる資性の上に、父の宗教的觀念が、ある影響を與へたことの多少有つたであらうところの尼公が、誘惑多き世俗から遁れて、守らねばならぬと自覺した節義を完らする爲めに、夙く既に出世間的境界に身を處くの道を選んだといふことは、

有り得べきことであつたと想像される。そして強い決心と鋭敏な理智によつて特に斯の道を選んだ尼公の態度は、この道の爲めにたゞ始終一貫、眞に不退轉であつた。家門滅亡、一身軛軻の悲運の裡に處しても、いよ／＼その道心は堅固の度を加へるのであつた。

遁れて武州に隱棲するに及んで、始めて心源ト山和尚に見えて、その善知識を得たことを非常に悦んだ。そして益々志を持して參禪辨道をつゞけた。遂には深く眞乘に體達し玄機旨に契うて和尚の法を傳へたといはれて居る。

元和二年四月十六日、五十六歳を一期として、端然と安坐したまゝ、微笑を浮べて生けるが如き安けさの態で圓寂した。臨終の前、ト山和尚を招んで、自分が生涯佛道を行じた屋舎を喜捨するから、そのまゝ一個の禪院として法燈を後代に遺してくれらるるに、と、くれ／＼依頼した。で和尚はその遺言の通り官に請うて清淨伽藍とし、尼公を開基とした、寺號は尼公の法號そのまゝに信松院と名けたのである。

正徳四年四月が丁度尼公の一百年忌に相當するので、同寺の前任四世梅樹和尚が、武田氏の一門及び舊臣の重なる人々と諮つて盛大なる法筵を設けて尼公の追資を營んだ。そして尙ほその紀念として、當時曹洞の英傑として稱せられた円山禪師を特請し七十餘員の衆僧を集めて結制安居を嚴修した。禪師は法華經を講じて、一夏内外の道俗をして極大乘の醍醐味に飽かしめられたといふことである。

參禪なすべき事、參禪に別の秘訣なし、唯生死

の切なるを思ふのみ。

佛神信すべき事、佛心叶へば時々力を添へ、横

心を以て人に勝てば歸れて亡ぶべし。

——武田信玄

松杉風外の聲

了然尼

了然の氏姓——中宮の少御——良妻賢母——眞實報恩者——二禪師を訪ふ——面皮を焼いて志を達す——慧春と了然——初發心時辨成正覺——達磨の誨勵——不惜身命の道心——了然の禪機——その後半生——ての學才

了然といふのは出家の法諱で、法號を大休と云ひ、別に知眞とも稱した。葛山内記といふ人の女で、名は總と云つた、實に武田晴信入道信玄の曾孫であるといふ。二代將軍徳川秀忠公が、その女和子を納れて後水尾天皇の女御となし奉つた。その時總女は選ばれてお付きの少御となり埋木と稱して奉仕することになつた。女御は後に后となられて、東福門院皇后と申されたが、皇后の崩後、總女は江戸に歸り、間もなく嫁して武田壽庵の妻となつた。

選ばれて禁中に少御として仕へた彼女である、勿論美人であつた、才媛であつた。而して壽庵との仲に二人の子があつたが、彼女は貞淑な慈愛に充ちた良妻賢母であつ

た。その家庭は圓滿な幸福なものであつた。然るに彼女は夙に禪の宗乘に心を歸してゐたのであるが、つひには徹底其の玄に參じ眞に達して、吾れ人共に存分に法喜禪悅に飽滿したものであるとの念願から、切に出家を思ひ立つやうになつた。既に妻として、そしてまた母として、普通の女の天分は一應果たした彼女は遂に素志を決行することにした。決行しないわけにはいかないほど、その求道の念は切なものとなつた。併し彼は尙ほ家庭に對する温い同情は決して失はなかつた。勿論出家するに就いては良人の許しを得ねばならなかつた。而して良人壽庵の爲めには、彼女自身が物色して相當な妾を薦め、自分がゐなくなつた家庭に不都合のないだけの方法を講じて置いて家を去つた。

「流轉三界中。恩愛不能斷」と佛は説かれた。男まさりの氣象があつたとはいへ、求法の念の熾烈なものがあつたとはいへ、さすがに女は女である。いよく懐しい良人と別れ、可愛い子供を残し、住み馴れた楽しい家庭を後にするのだといふ刹那、いかに斷ち難き戀着の心に羈されたであらう。いかに忍びがたき恩愛の情に引かされたであらう。併しながらまた佛は「棄恩入無爲。眞實報恩者」と示された。彼女は克くこの佛語を體した。その斷ち難きを斷つた。その忍びがたきを忍んだ。決然家を去つて直に正師家を求めにかゝつたのである。

最初先づ鐵牛和尚の峭峻な禪機を慕うて尋ねて往つた。ところが二人の子まで産んだ年増とはいへ、姥櫻色まで褪せやらぬ婀娜たる彼女の容色は、心牆壁の如くにして以て道に入るべしと行ひ澄ます叢林を驚動せしめるに充分であつた。眞面目な、痛切な志望を齎らして往つた彼女は、全然とりつく島もない有様であつた。鐵牛和尚は、是れ正法を擾亂せんとする妖魔であると云つて、弟子達に命じて門外に連れ出さしめたのである。ソコで彼女は更に駒籠の白鷗禪師の處に往つた。禪師も亦其の年齢姿色尙ほ太だ壯なるを見て道業に障りありとし、如何に歎願しても得度を許されなかつた。

彼女是非常に失望落膽したが、悄悄と引返すより他仕方がなかつた。ハテどうしたらば……と思案に暮れつゝ街を歩いてゐると、フと或る家の椽先に赫々と盛に起つた火を入れて一つの銅斗が置かれてあるのを見た。刹那、或る考が浮かんだ。「一寸お借し下され」と請うてそれを取り上げるや、火を覆へして其の美しい顔面に押し當てた。落花狼籍あたら嬋妍の俤は燬き爛らされた慘ましひ痕を留めて打ち壊された。近所合壁の驚き騒ぐのにも目もくれず、サア之れでよし、と直に引返して復た白鷗禪師に見えた。

鐵よりも堅固な、火よりも熱烈なその一念はつひに貫徹した、禪師はその親教師となることを快く肯つた。彼女は式の如く緑の黒髪を卸し、大休了然の法名を貰つて佛弟子となることを得たのである。

昔遊宮裡燒爛麤 今入禪林燒面皮

四序流行又如此 不知誰是箇中移

の一首はその時賦したものであるといふ。春風春雨花既に開き、春雨春風花また散る昔日殿上に粉粧を施し錦繡を装うたは花の盛りか。今桑門に入つて顔貌を糞土にし壞色の衣を纏ふは花の凋花か。形の花はさもあらばあれ、聖い心の花は永へにそこに咲き出でることを得たのである。

此の一段の光景は、彼の慧春の場合のそれとまさには好一對をなすものである。その中年の女性であつたことに於て、そのすぐれた美人であつたことに於て、而して其の美貌を烙き傷けて熱烈な出家の志望を表はしたことに於て、或は兩者の事實が混入して傳へられたのではあるまいかと憶測する者すらあるほどに、酷しく相似て居る。併しながらこの兩者の殆ど同じやうな事實に對して、吾々はどういふものか別々な感じを惹かしめられる、女の盛りを三十歳過ぎまで空しく深窓の裡に送つた慧春の出家は、どうしても其の深刻な宗教味の裡に、そこに一種の文學的な感傷的な着色が、陰惨な影に包まれて居りはしまいかと揣摩したくなるが、妻となり母となつて、女一通りの

道を通つて来た、世間的に圓滿であつた了然の發心は、それが飽くまで眞面目な、純然たる宗教的仰信からであるやうに思はれる傾向が顯著である。

目的地に達せんとする者は、その第一歩が肝要である。「發心正しからざれば萬行空しく施す」とも説かれ、「初發心の時正覺を辨成す」とも示されてある。慧可が徹曉雪に立つて道を求めた時に達磨は「諸佛無上の大法は解し難く入り難い、曠劫に精勤して行し難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ばねばならぬ、輕心慢心を以てしてどうして眞乘を冀ひ求められよう」と誨へた。慧可は左臂を斷つて求道の赤誠を披瀝した。「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」眞に道を求むる者にあつては、餓ゑたる者の食を求むる如く、渴したる者の飲を思ふ如く痛切なものでなければならぬ。佛道修行は不惜身命、たとへば頭に火のついたのを揉み消すやうに、鳥の飛ばんとして蹠足するやうに、たゆみのない緊張した精進を要する。

熱烈な信念から、世俗的の總ゆるものを抛棄して、佛法海中に跳び込んだ了然は、

初發心の時正覺を辨成するの概があつた。その勇猛精進、專一辨道のほども思ひやられる。幾ほどもなく妙に禪機を體得し、深く法源に達した。天下の衲僧も舌を震ひ、堂々有髯の男子もよくその鋒芒に當る者はなかつたといふ。而も慧春のやうな狂暴な態度があつたことは一も傳へられてゐない。

六十六年秋色久。凜々月色向人明。

莫言那裡工夫事。耳熟松杉風外聲。

これは彼れが末期に遺した一絶であるが、句中の消息、言外の響きは、ゆかしく彼れが後半生の精神生活を偲ばしめるではないか。了然既に道を得てのちは武藏落合村の泰雲寺に閑居し、また蓮乘院にも住した。共にその中興開山であるといふ。この兩個の小院に在つて六十六歳圓寂に至るまで、悠悠たる春秋を皓潔の月のやうに行ひ澄まして送つた。而も別に閑工夫を弄するのではない任運騰々として松杉風外の聲に耳を熟せしめたといふ。「坐禪は習禪にあらず只是れ安樂の法門なり」「語默動靜體安然」

として法樂に飽いた彼れが圓熟の境界を髣髴するものと見られるではないか。
 了然は頗る漢學の才があつた。そして詩も作れば歌も善くし、能書の稱もあつた。
 單に學者としても、當時に勃興した文壇上の一女傑として見らるべき一人であつたのである。

其の子葛山重藏は尾張侯に仕へて藩儒と爲つたといふことである。

一性圓通一切性。一法偏合一切法。一月普現一切水。一切水月一月攝。

諸佛法身入我性。我性還與如來合。一地具足一切地。非色非心非業行。

彈指圓成八萬門。剎那滅却三祇劫。

— 永嘉大師

不空中の空 通女

元祿時代文運の盛觀——通女の祖父——通女の伯父——通女の父——驚くべき慧聰——處女賦——江戸に下る——その著書——その精神修養——通女と佛教——了然尼との談論——盤珪禪師との問答——その辭世——珍らしい女丈夫

元和優武の後、徳川家康文教に意を注いでより、應仁以後衰廢殆ど地を拂ふの状態にあつた文學は漸く勃興の運に向ひ來り、元祿の交に至つて多士齊々蘭菊の美を競ふの盛觀を呈するに至つた。碩儒に木下順庵、新井白石、室鳩巢、伊藤仁齋及び東涯、萩生徂徠等が輩出し、そして閨秀才媛も亦多くを出して居る。捨女、智月尼、園女、秋色等は俳壇にその名を飾り、了然尼、皎月尼等は儒學を以て稱せられた。而してこれらの女傑と伍して更に一等地を抜くの概あつたのは實に井上通女である。

片桐且元といへば、かの賤ヶ嶽の七本槍の一人として、また豊臣氏の末路に際し家康の難題に辯疏甚だ力めて苦忠を致した人として、廣く人の知るところであるが、そ

の且元の弟に吉岡彦右門といふがあつた、兄と共に禍を避けて攝津の茨木村に遁れ、徳川氏の世となつても再び出で、仕ふることもなくそこで一生を不遇に終つた。彦右衛門に六男一女があつた。他は世に聞こゆるに至らず、四男の門三郎と季子の元固だけが顯れてゐる。門三郎は武勇義烈の士で、元固は學識才能の人であつた。而して通女は實に此の元固の女である。

門三郎と元固とは夙にわが家名を重んじ、どうかして廢れたるを興し父祖を顯はしたいものだと、互に相語り相勵ましてゐた。門三郎は先づその志を遂げんが爲めに諸國を歴る武者修行に出た、そしてその武幹は端なく四國丸龜の藩主京極忠高の爲めに知られ近習役として召し抱へられて、井上姓を名乗ることになつた。間もなく忠高は亡くなつたのであるが、門三郎は平素渾い恩遇を受けたことに非常に感激してゐたので、家老の加納又右衛門と共に殉死を遂げた。又右衛門は七十餘の老人であつたが、門三郎は僅かに二十四歳の前途有爲の青年であつた。嗣君高知は痛くその義烈を追惜し、

元固が攝津にゐたのを召して兄の後を嗣がしめ、祿二百五十石を賜はつて家門祭祀を絶たざらしめた。元固は生れて蒲柳の質で、兄門三郎が専ら武道を練るのに效ふことも出来なかつたので、夙に志を文學方面に向けた。丸龜藩に仕官の後も、病氣保養と稱して暇を請ひ、京都に遊んで當時の學者として稱せられた松永禮三、米川操軒、三宅道乙、宇都宮由明等の諸儒を叩いて専ら朱子學を修め、殊に操軒には深く信重せられた。

通女は萬治三年に丸龜城西の御手廻り長屋に産れた。その死は元文二年で七十九歳であつたが、この間、寛文、延寶、天和、天享、元祿、寶永、正徳、京保の頃は所謂一口に元祿文學といはれる徳川時代文運の隆盛を極めた際である。さうして通女の爛漫たる硯園筆華も亦この際に點飾せられたのである。

彼女が如き家系を有し、彼女が如き父により、彼女が如き伯父の家に生れた通女はあのづから遺傳感化の大なるものあつたのは争はれない。しかも彼女は驚くべき慧聰

の資性を有つて生れた。その五六歳の比には烈女傳、女誠等を讀み、七八歳にして源氏物語、枕草紙なども讀んで、その重要な箇所は暗誦することすら出來たといふことである。彼女が十六歳の時作つた「處女賦」がある。

| | | | |
|---------|--------|---------|--------|
| 遵嚴君之明訓兮 | 居茲閨闈之幽 | 師詩書學四德兮 | 經內則習和柔 |
| 哀牝鷄晨於殷兮 | 喜關雎匠於周 | 遍看古昔之傳兮 | 心與烈女同遊 |
| 溫古寧不能及兮 | 修身希寡悔尤 | 書中不遠萬里兮 | 眼前忽到幾州 |
| 見彼敬羌于魯兮 | 謁此孟子於鄒 | 履霜以思致氷兮 | 抱是寒水之心 |
| 求女師其未少兮 | 古人德以迄今 | 向窓下而紡績兮 | 燒膏油而執針 |
| 服節儉不暇飾兮 | 何治容而效淫 | 只徒飽食溫衣兮 | 無成而送光陰 |
| 此小勤不足苦兮 | 耻惰身不如禽 | 嗚呼余志之堅兮 | 不可以貧富侵 |
| 括囊願鉞口戒兮 | 畏驕鑑女史箴 | 西風來催秋砧 | |

| | | | |
|---------|--------|---------|--------|
| 樂只有二親在兮 | 承教何爲不力 | 家尊之嚴且慈兮 | 母氏之慈而則 |
| 惠予以義方愛兮 | 教予以正法戒 | 令余得窺古賢兮 | 使余無生姑息 |
| 知女子之多憤兮 | 識事之在蠶織 | 安閨中志在內兮 | 不除而樂草色 |
| 身自不出戶庭兮 | 言則不出於國 | 精神肅而以困兮 | 四體靜而端直 |
| 恐日月之荏苒兮 | 無業之供子職 | 願守身無貽罹兮 | 永思而以抑々 |

十六歳の少女が立派に女子の理想を歌つて居る、之れを見ても彼女が如何に幼少より文才煥發してゐたか知られるではないか。斯くて彼女が二十歳頃に至つては、漢籍國文詩作詠歌いづれも當代の學者を凌ぐに足るほどであつた。學業のみならず、裁縫より行儀作法の末に至るまで苟も女子の心得べき一通りの事は皆極めざるはなかつた。且つ父の元固は朱子學者であつただけに女子の淑徳といふ點に嚴に意を注いで教養したので、それほどの才媛でありながら決してその才に誇るが如き態度は見せなかつたといふことである。

天和元年、通女二十二歳の時、藩主高豊の母堂養性院の召しによつて始めて江戸に下つた。「東海紀行」はその時の作として有名である。江戸に在つて養性院夫人に仕ふること九年、夫人卒するに及んで郷國に歸り、同藩の三田宗壽に嫁した。それよりは人妻とし、人の子の母として日夜家を齊ふることに意を専にしてゐたが、彼女が五十五歳の時その長子宗衍に嫁を迎へてより、家事を擧げて新夫婦に委し、悠々として七十九歳まで好める道に老後を樂んだのである。

彼女が世に遺した著書には、家訓。東海紀行。江戸日記。歸家日記。括囊集(詩集)往事集(歌集)續往事集。秋燈集(歌集)和筆記。源語秘訣開書。宗川子歌談。三鳥博考三草三木考、等がある。之れらを一閱すれば、彼女が百合花の如き佳人で、さうして秋霜に驕る菊の如き徳を具へ、さうして春風駘蕩百花爛漫の如き詞藻文才を縦横にした女傑であつたことが首肯される。

しかしこゝには彼女の詞藻文才を見ようとするのでない。それらを具さに知らうと

思ふ者は彼女が著書を繕き見るに任せて、こゝには彼女が佛教に對しての態度、彼女と禪との關係に就いて傳へられてある事跡を探り、彼女の精神修養の方面を窺ひたいのである。

通女は、父の嚴肅な朱子學を本位として教育せられたので、いふまでもなく彼女の修養の根本は儒教に依たものであつた。従つて人生觀も儒教の現世主義で、安心立脚の地を固めるのも重に天命説によつたものらしい。されば未來教の着色を帯びた佛教は、彼女にはあまり喜ばれなかつた。之れを排斥するといふほどではなかつたが、少くとも之れを好まなかつた。平生その子女に教へて、
我れ死すとも火葬する勿れ、施餓鬼を修むる勿れ。塔婆を建つる勿れ。念佛を唱ふる勿れ。喪祭の如きは奢る勿れ。萬事を質素にして家計の程度によるべし。
と、屢く言ひ聞かせたといはれて居る。けれども禪だけは心を傾けてゐたらしく、また玄理に造詣することもよほど深かつたらしい。想ふに、彼女の氣宇からしても、

禪の抱括的な悠大な教理が最も彼女には喜ばれたものであらうし、また主静を唱説する宋學の修養上からしても、禪の靜觀的工夫が、彼女には大に資るべきものとせられたのでもあらう。

その江戸在住の比、一日かの了然尼を訪うて大に談論したことがあつた。共に才色雙美を以て一時に謳はれた女傑同士である。その談論はよほど面白かつたらうと思ふ。通女の傳を記したものによれば、彼女はその時痛く了然を論破したといつて居る。が、議論の輸贏は孰れとも恐らく決しられなかつたらうと思ふ。何故なれば、双方漢學者であつたにせよ、兩者は各々その守持する根本思想が相異して居る。了然は面を烙いてまで出家したほどで、抜くべからざる信仰を禪に有し、その縦横の文彩はこれを禪機の現成に應用したものであつた。通女に於いては立脚地が了然とは主客正反で、禪要に心を注ぐことはしたものの、其の根本固く操つて動かぬところは儒教に存してゐたのである。この相異した根柢に立つた二人の議論は、どこまで往つても互に相下ら

ないものであつたに違ひない。この時通女が了然に與へた歌に

常にゆく道なくばこそ世をうみに

尼の流せる舟も慕はめ

とある。通女の立場は正にこの通りであつたのである。これに對して了然は何と酬いたか、それは遺されてゐないが了然は了然で、出世間の見地からして、この世間的理想に慊らなかつたであらう。

當時禪林の巨壁、盤珪禪師が丸龜に應化せられたとき、通女はその室を叩いて禪の要妙を聽いた、禪師が卒然として「萬法は空か不空か」と問うたに對し通女は恰も響の聲に應ずる如く、不空中の空、と對へた。禪師は「善哉」と首肯して微笑した。會下の參徒傍に在つてみな舌を卷いて驚歎したと傳へられて居る。通女の活禪機が見えるではないか。

その辭世には斯うある。

一氣終時萬事休。樂天知命又何憂。
子孫有孝能思我。常在聖賢書裏求。

我もまた正しき道にたふるれば

かくのみなりと思ふばかりぞ

一氣といひ、樂天知命といひ、彼女の思想は最後まで宋學にその根柢を有し、儒教の倫常を以て修養の土臺としてゐたことが明かに見られる。さうして、彼女は一方では佛教の宗教的形式を好まなかつたにせよ、禪の玄理にも參じて、並せて彼女自身の確乎不動の安心地を見出してゐたのである。

世の迂儒、動もすれば偏狹固陋の見到に墮着して、みづから天を謂ひ命を談しながら天命の何なるかに徹底することも出来ず、さうして、空理の何であるか、虚無の何であるかも知らないでゐながら、佛老とさへ言へば無下に排斥する。通女に至つては、大にそれら所謂道學者流と撰を異にし、儒によりまた禪に參じその守る所は確く守つ

て動かざるの境地を見出し、高邁な一見識を樹立してゐた。

程明道は「廓然大公物來つて順應す」と言つたが此の境界は偏狹固陋の見到に囚はれた俗儒の到底夢想だも及ばぬところて、「萬法空が不空か、不空中の空なり」と體得するものにして始めてこの妙趣を味ふことが出来るのであらう。この點に於いて通女は、その學ぶところの儒教に依つて能く天を樂み命を知るの根本精神を體し、同時に佛教を奉ぜずとも而も能く佛教の安心を得てゐた珍しい女丈夫であつたと謂ふことが出来るではあるまいか。

道既無形體。心何有拘泥。達人能明時。渾順天地勢。

——横井小楠

慈悲心孝順心 慈門尼

少水の魚——人生の無常——深刻なる感悟——跽跪一番せよ——入道の第一歩——薄幸なり
し慈門——その出家——得度の師——乞児を憐む——盜賊を説服す——佛心とは慈悲心孝順
心——榮西禪師浪士を憐む——女性的心操

私は或る山間僻陬の地で一夏を過したことがある。ある日細い一條の谿流をどこまでもくと溯つた。それは恐ろしい早魃で、田床が龜裂を生ずるほど、池の水門は幾本もある栓を一番下まで抜き去られて、醜い泥の底を暴露するほど、水といふ水は悉く強烈な大夏の光に乾し上げられ、素樸的な百姓達が毎日々々眞面目に雨乞の祈禱をする頃であつた。その谿流もヅツと末の、海に注ぐ所の二三町が程は僅かに足の甲を浸すだけの水を見るのみで、それから上は一里ばかりの間、全く石原である。谿の奥まで往くと、どこからともなく落ち合つた雫の集りが、囁くやうな、せいら笑ふやうな音を立て、流れてゐる。而して處々に小さな淵を作つてゐる。その流れの音を聞く

少し手前で、私はチヨツとした凹みに湍水があつて、十數尾の小鮎が、中で楽しさうに游泳して居るのを見付けた。——あゝ哀れむべき小鮎よ、汝は、汝の生命がこの水と共に數日のうちに消えて無くなることをも知らずにゐるか。この湍水は恐らくこゝ四五日にして蒸發し去り涸れ盡すであらうに。遮莫人生また小鮎の湍水に於けると太だ相似たるものあるではなからうか。紅梅の綻び初めたやうな、可愛らしい口元をして笑み初めた稚兒は、忽ちにして血氣溢るゝ春駒の若さを誇る青年となる。やがて壯年となる、倏ち老いさらばうてつひに現し世から消えて無くなる。況んや、朝の紅顔夕の白骨、冥府の徴しに逢へば、鬼とも取り組まん強者壯者であらうとも、暴風の前の大木のようにポッキリ折れてしまはねばならぬではないか。而も谿流に遊ぶ小鮎が、水の次第に蒸發し去るを知らずに湍水を永久の天地として、更に上流の水に移るのを忘れてゐるやうに、おろかなる人の子も、時々刻々に涸れゆく生の流れに在つて、徒らに現在目前に戀着し愛執して居るではないか。——

私は疲れた足を投げ出して、少水の魚を凝と熟視ながら、如何に人の無常遷流まぼろしのやうな世を、それとも感悟せず、はかない生を送るかを想ひ観て、しみくと痛ましい悲しい感じを禁じ得なかつた。

無常といへば、如何にも弱々しい、消極的な、ただ好ましくない語であるとし、畢竟佛者が人をその法に引き入れんとする方便に説く語である、など、斥け、或は之れを以て佛教を厭世的であるとして攻撃する者もある。如何に攻撃し非難したからして、人生無常の事實は取り去られない。ポーブも「年々歳々、歳は毎日我等より何物かを盗み去る、而して遂に我等の全體を盗み去るに至りて止む」と云つて居る。承陽大師は「命は光陰に移されて暫くも停め難し。紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし」と説かれた。年を割つて月とし、月を分つて日とし、日を時に、時を分に分を秒に、秒を更に刹那に刻んでも、曾て固定した遷らぬ時間は得られない。カチリ僅かに音がする、音のしない前と後とがある。昨日は昨日に在つて今日であつた。今

日は明日に於いて昨日である。明日は明日の今日で昨後日の昨日となる。時間は暫くも停ることなく遷り、而も之れと同時に空間の事象も亦絶えず變る。然るに愚人は眼前身に直接した大變化を見ねば覺り得ない。時の経過は毎日顔面から紅頬を盗み去るのに気がつかずして若さを誇つて居る。刻々に緑の髪を盗み去られても知らずに美しさに自惚れて居る。いつしか血の氣が失せて皺皮を刻み、雙鬢に霜白う置かれたことを、鏡に告げられてあゝと嘆聲を洩らすとも既に遅い。或は夢幻のやうに雙親に分れ、泡沫のやうに愛兒を喪ふ如き大變化に唐突して始めて無常の理を膽に銘じて感悟する。身に直接な事變に遇うて尙ほ此の理を悟らないといふならば、其は無神經の徒である。人情なき者である。瓦礫木石土偶である。

無常遷流は實に宇宙の法則である、事實である、之れを感悟するの情は人生最も深刻なものである。深刻な情は最も強い力を生む。たゞ、悲しんで傷ぶるのではならない。大變に遇うて狼狽へてはならない。湍水の小鮎が、水の盡きんとするに至つて始

めて騒ぎ出し撥ね廻り、そのまゝ空しく干乾になり果てるやうにあつてはならない。此の時跳梁一番上流に跳び入らねばならない。不測の變轉に、歎き悲しむのは人間の至情である。至情の湧くところ、この時ほど人は眞面目な時はない。眞面目に、深刻に、人生世態の真相を観るとき、そこに蹀躞奮躍を要する。現在の悲境、盡さんとする湍水を躍り出で、新なる精神生活の流れに跳び込むのである。新なる流れ、そこに永久の生命を繼ぎ得る、そこに楽しい天地に逍遙することを得る。無常とは變化と同じ意義である。變化あつて始めて進化あり發展あるを見る。無常といふ語は決して厭はしい語ではない。佛者假設の言でもない。此の理あるが爲めに、人生價値あり、生命あり、活動も努力も意義あるものとなるのであることを知らねばならぬ。

故に道元禪師は「世間生滅無常を觀する心亦菩提心と名く」と言つて、此の理を感悟するを以て入道の正しい第一歩と示された。また事實、禪師自身も然うであつたが、

其の他の高僧達も、多くは無常觀から發心出家せられて居るのである。

慈門尼の發菩提心も矢張り、動機は無常變轉の事實に、痛ましく強く打たれた深刻な感悟からであつた。慈門は江州彦根の藩士武居次郎左衛門正景の長女に生れたのであるが、十一歳の時母を失つて、早く先づ、春の恵みの地上の總てを育み生ふし立てるやうな温かさを其の家庭から奪ひ去られた。續いて十五歳の時、父も亦此の世を去つた。辿りゆく闇の小徑に燈火を失つたやうに、荒浪狂ふ海原に舵を折られた小舟のやうに、せん術もなく、頼る途も知らない、憐れな痛ましい運命の渦卷きに投じた。片枝に脈の通うて僅かに笑み初めた蕾の白梅、淡雪重く料峭の氣に凍えて落ちもせん慘ましさである。

彼女は、人生の無常頼みがたき真相を、骨に徹し髓に浸み入るやうに痛く深く感じた。悲傷に次ぐに悲傷の日を暮らし、哀愁また哀愁の年を送つて娘盛りの十八歳になつた時、つひに浮世の現實生活にふつり思ひを斷つて、緑の髪をおろし、佛に仕ふ

る尼となつてしまつた。鬼も十八といふ妙齡である。殊に天性色白く髪ふさやかに、眼鼻口元、容姿人にすぐれた美人であつたので、當時に在つて衆俗の齊しく惜み歎ずる所となつたといふ。如何に彼女の感悟が深刻であつたか。あゝ人生の悲惨事、當時の彼女の心事を思へば、そゞろに同情の涙眼に滲むを禁じ得ないではないか。

慈門が就いて得度を受けたのは、里根村廣慈庵の一枝和尚であると傳へられて居るが、一枝和尚の如何なる大徳であつたかは知るに由ない。また慈門がどんな教を受け、どんな風な修行をしたかも詳かでない。たゞ慈門の出家は享保二年で、十八歳の時なること、その入寂が安永四年七月十九日、世壽七十六、法臘五十九であつたことが記されてあるのみである。が次の逸話によつて、彼女が、如何にも女性らしい、如何にも佛徒らしい、やさしく慈悲深くあつた、その温情に富んだ人と爲りと、その穩健な修養とが窺ひ知られる。

それはある歳の暮であつた。風はヒュー／＼と魔の咀ひのやうな唸り聲を立て、

人の身に錐で揉むやうな寒さを覺えしめつゝ吹き荒む、風に捲かれて鶯鳥の胸毛のやうな雪がヒラ／＼と狂ひ散る、暗い影は次第に日暮れの幕を垂れかゝつて居る冥しいもの凄いやうな時、慈門が草庵の前に當つて憐れげな弱々しい人聲が聞えた。慈門やをら立つて戸を開けて見ると、齡尚ほ幼き兄弟二人の乞食が、身にあらめの襤褸を纏ひ、顔は血の氣を失つて土色に、暴露しの手足のみ冷凍て走黒く張切れさうにも見え、ブル／＼胸懐ひに齒の根をガチつかせながら、「何か食べるものを」と乞ふのであつた。慈門は一目見るから、身を斬られるやうに、痛ましくあはれを催した。取り敢へず食べる物を取らせたが、その寒げな身装が氣の毒でならない。と云つて自分も平素枯淡な簡易生活を營む世捨人の身として施すべき何の餘裕も有たない。而も眼前この憐れな有様を見ては、彼女が仁慈の情はわが身を顧みる暇なからしめた。彼女は早速自分の着てゐる衣服を脱いで恵み與へるのであつた。そして尚ほその満腔の同情も之れを施すべき充分の力無きをうらみ、

わびびとのあはれは外にすぎさねど

覆ふにせばき袖ぞうらめし

といふ歌を詠んで居る。温かい至情ではないか。美しい心操ではないか。矢張り或る寒い夜のことであつた。しん／＼と更けゆく夜中頃、雨戸が頻りにゴト／＼と音するに、慈門は不圖目を覺まして、ハテ北風の吹き起つて戸に訪れるのか、飢ゑたる鼠の棚を渉るのか、など考へて居ると、あらず、怪物のやうに覆面した一人の盗児がミシリ／＼窺音さして押し入つたのであつた。聖い堅い信仰の下に心の安けさを得て居る慈門の眼には畏るべき何物もない。この時つゆばかり騒ぐけしきもなく、徐ろに身を起して盗児に向つていつた。「見れば、そなたは薄着ぢや、この寒い夜中に、定めて野こえ山こえして此まで來られたのぢやろ、氣の毒や、寒くもある、腹も減つたである、待ちやれ、暖かいものまいらせよう」と。而していそ／＼立つて爐に櫛を焚いて火によらせ、粥を煮て食べさせるのであつた。

さて改めてまた言つた「見らるゝ通り世を捨てた身ぢや、物らしい物とは一つも有たぬ。なれど物欲しとてわざに来られたもの、そなたの望みのものは何なりと持つて行きやるがよい。さる代りにそなたに一つ囑むことがある。見受けるところ、そなたは倔強な軀體、如何な業もすれば出來ぬことはなさうぢや。それに、かゝる淺ましい境界に落ちて、そなた一人の身はさらなり、親兄弟の名まで汚し、世に人並の交はりもなり兼ねるやうになるとは、かへす／＼口惜しい限りぢや。向後はその心をサラリと改めて、盗みなどの善からぬ所業はフツツリ思ひ止つて呉れやれ。わが庵の中の物は残らず進ぜるほどに、たとへ僅かばかりでも其の賣代を基に、身にかなうた正しい生業を立てられい。その方がどれほど心安いことであらう」

春の女神の臨むところ、その和かな風の前には、その暖かな光の下には、石のやうに固く結ばれた氷も溶ける、見る影もなく枯れ果てゝゐた草木も芽み初め萌え出でる。慈悲大同情を以て對するとき、たとひ猛り猪の如き癡惡狂暴な者も、之れに感じ之れ

に動かされざるはない。慈門が真情こめての懇篤親切な言葉聞いて、盗兒は夢から覺めたやうに、翻然として従來の惡業を悔悟し、慈門の前に手を支へて衷心其の罪を懺謝した。而して一物をも取らずして出で去つたといふ。

無常觀は、佛道入門の第一歩を成すものであることは前に言つたが、一たび佛門に入り佛弟子と爲つた以上は、直に佛の心を以て己の心としなければならぬ。「佛心とは慈悲心孝順心なり」と梵網經に明かな定義を示されてあるが如く、佛の心とは慈悲心孝順の二つである。二つのものは一つである。一つとは所謂常住佛性である。即ち平等絶對の本體と合體した吾々の本性である。この本性の顯著れが慈悲心孝順心である。絶對の本性から出た心、何物をも抱擁し、總ゆる物を愛護する、固より廣大な心である。それが上長に對する時孝順心と名づけられ、それが目下の者に及ぼすとき、慈悲心と謂はれる。二つのもの本より一つ、之れを佛心とするのである。衆善萬行も悉く此の心を源とせざるはない。

榮西禪師の許に、ある時尾羽打ち枯らした一人の浪人が救ひを請ひに行つた。禪師見るからあはれを催して何をがなと思つたが、惠むべき一物をも有たぬ。つひに佛殿安置の如來像の眉間から白毫光を抜き取つて、之れを錢に代へよと云つて與へた。侍僧驚いて詰り問うた時、禪師は「諸佛の行願もとより慈悲を以て本とする。佛もし今の貧人の如きを見給はゞ、たとひ身を割き手脚を折りても、之れを救濟せられるであらう」と説いて示された。

其の他、古今の高僧善知識みなこの佛の心を心として世を濟ひ人を度して居られぬはない。慈門尼は、まさによく佛祖を學んだ者と謂ふべきであらう。彼れが大慈悲大同情の心行は、末世澆季の得易からざる清範とするに足るではないか。

慈門は、折りにふれて和歌を詠んで自ら樂みとしてゐたが、草稿を儒者の澤村琴所に送つて正削を請うことにしてゐた。けれども、琴所が評判の美男子であつた爲めに、若し世上のさがなき誤解を受けてはならないといふ用心から、つひに一度も面晤した

ことがなかつたといふ。また彼女のつゝましやかな、ゆかしい心操の偲ばれる一例とするに足るものである。

譬へば曠野沙磧の中に大樹王あらんに、若し、根、水を得れば枝葉花果悉く皆繁茂するが如し。生死曠野の菩提樹王も亦復是くの如し。一切衆生を樹の根と爲し、諸佛菩薩を花果と爲し、大悲の水を以て衆生を饒益する時は、能く諸佛菩薩の智慧の華果を成就す。是故に大悲は天の如し、普く一切衆生を覆ふが故に。大悲は地の如し、悉く一切の法門を生ずるが故に。

— 華嚴經

俳味 禪味

其一 捨女

俳諧の天才——秀句——夢の如き幸福——佛經の文——莊子の語——捨女の出家——盤珪禪師に參ず——賢女三物——ホーマーの句——大禹の語——具舍の文——本來無一物——無一物中無盡藏——四祖の垂示——悟道後の捨女——捨女の子

わが俳諧史傳を繕いて見たものは、その中の幾頁を賑はして居るやさしい人「捨女」の名を看過することは出来ない。

捨女は、丹波の柏原で田氏の愛娘と生れた。天真流露、その風流趣味は早くも幼少から殆ど天才的に萌してゐた。

雪の朝二の字くの下駄の跡

は彼女がまだ頑是ない六歳の稚兒の、らうたげな唇から綻び出でた言葉の花として、あ

まねく人口に膾炙せられて居る。奇才丹波の捨女の名は早くもバツと界限に廣がつた。都の或る高貴人は特に

柏原にをしや捨て置く露の玉

の一詠を賜はつて歎賞した。父母の恩愛も一入で、此の玉いよく輝き増せと良き師を求めて琢かした。初めは季吟法師に従つて和歌をも學んだが、後には故あつて俳諧は主に松堅を師とした。

雑煮々や千代の數かく花がつを、

うさ中に馴れて雪間の嫁菜かな

などは人の知る秀句である。

二十歳でその宗家の花嫁となつた。琴瑟相和して、やがて四人の子の母として幸福な家庭を作つた。が、有爲轉變の人の世に、謂ふ所の幸福は、多くは永く缺くことなさを得難い。曾ては柏原の露の玉と謳はれた捨女の幸福は、恰度葉末に宿るその露

の、ほんの朝日待つ間の儂ないえにしてあつた。彼女はまた三十歳ならずして、玉椿千代かけて契つた良人に死に別れて、寂しい嫗の身となるの悲運を見たのである。

観ずるも夢の世、観ぜざるもまた夢の世、自然、人生、遷流常無きは何人も否定することの出来ない事實であることは前にも言つた通りで、佛が罪業報經に

水流れて常に満たず、火盛にして久しく燃えず。日出で、須臾に没し、月満ちて已に復た缺けぬ。尊榮豪貴の者も無常なること復た是れに過ぎず。

と教へ、また出曜經には

是の日過ぎぬれば命もまた随つて滅す、少水の魚の如し。

と示されて居るのや、莊子の

天と地とは窮りなくして人の死するは時あり。時あるの具を操つて而して窮りなきの間に詫す、忽然たること騏驎の馳せて隙を過ぐるに異なるなきなり。

と説いて居るなどは、如何にも適切に人生この一面の眞理を道破して居るものではない

いか。而も人は常に此の變化流轉の中に在りながら此の事實を諦觀せず居る。たゞ生より死への最後の大變化に接觸する時、何人も痛切にこれを感悟しないわけにはいかない。

たゞさへ感激を本とする文學趣味に生きてゐた捨女は、如何に深刻に危脆の世相に感傷したであらう。且つ尋常俳諧者流が一般に有する傾向として、世間的俗事には日比から超脱的態度のあつてあらう彼女が、此の際その強い動機からして卒に世俗的の總ゆるものを拋棄して、一出世間的の一路を憧憬するの念の禁じ得られぬに至つたのは已むを得ない。彼女はつひに

秋風の吹き來るからに糸柳

こゝろぼそくも散る夕かな

の一首を詠じ、残んの色まだ褪せぬ中年の女の悲哀に名残を留めて秋風に散る糸柳のそののやうに、その緑りの黒髪をふるし、人間の恩愛、世間の執着をふつつり斷つて、

壊色の袈裟法衣殊勝に行ひ澄ます尼となつた。法名を妙融といつて、深く淨土門に歸依し、專念に彌陀の本願を頼む念佛三昧を行じてゐた。が、尙ほ安心立命の地は見出せなかつた。

その頃、禪家の善知識で、定慧徳行一代に傑出した盤珪禪師といふがあつた。妙融の捨女は、諸方法活如來の如く喧傳する禪師の道譽を慕ひ親しく参趨して教を請うた。ソこで更めて禪師の得度授戒を受け、號を嶺雲、名を貞閑と稱した。その後、親參實究、專一に工夫辨道して、遂に省悟、師の旨に合ふことを得た。

艸よ木よ汝に示すけさの露

は、禪師が詠んで示された悟道發明の一句だと傳へられて居る。

無常觀は實に發菩提心の正路である。併しながら既に法味に飽いた道人の見地からすれば、世間の有象無象は渾然として一空に歸し、常住も無常も生死も有つたものでない。千差萬別すべて一空平等に歸するところ、そこに常住不變不生不滅の眞實體が

現はれる。

佛在世の時、七人の賢女があつて共に屍陀林に遊んだ。其の一人が一個の屍體を指して「屍は這裡に在り、人は甚の處にか在る」と一問を提起した。他の六人は直に此の語の眞意を諦かに了解して皆會心の笑を漏らした。帝釋天は花を雨らし、賢女の道眼明かなるを讚歎して曰つた「諸姉よ、諸姉が須むる所のもの吾れ何にても供養しまゐらせよう」賢女は答へた「吾等の家には七珍萬寶一として具はらぬものとなない。たゞ三種、求めて得ないものがある。一には根なしの樹一株。二には陰陽なきの地一片。三には叫べども應へざる谷一所」。帝釋天はいよ／＼驚歎した。「一切の物は悉く吾これを有せざるはないが、此の三物だけは實に如何ともすることが出来ぬ」と、遂に共々に佛の處に往いて此の事を白した。佛は「この深義を解し得る者はたゞ菩薩のみ」と微笑せられた。

お伽噺のやうな此の話題をもく／＼何を意味しなすものであらう。畢竟この三物は假

名のみで實體なきものではないか。帝釋は名に迷うて實を知らなかつたのである。有相無相順逆悲喜、彼れを執し是れを厭ふ凡夫の迷情は、滔々として雷に帝釋の亞流たるのみでない。禪に「探竿影像」の語あるはこの凡情を指して謂つたもので、本來無一物と教ふるはこれを打破する向上の一路を示すに外ならぬ。

此の見地からすれば、紛々たる世相、何の悲歎、何の欣求とか説くべきがあらう。

ホーマーは「生は夢なり死は覺むるなり」と歌つた。夢から覺めて夢を求むる、たゞ是れ本來無一物ではないか。大禹は「生は寄なり死は歸なり」と言つた。此處を去つて彼處に歸す、彼處とは那處、是れ本來無一物ではないか。具舎には「生死は柵頭の傀儡、一絲絶ゆる時は落々磊々たり」と説かれた。磊々落々本來是れ無一物ではないか。

が「無一物中無盡藏、花あり月あり樓臺あり、道果圓熟して深く眞要に徹底した者の眼より見れば、空のまゝに花あつて常住の相を現じ、無一物のまゝに月あり樓臺あ

つて不變の姿を示す。一心源頭惺々着、會て世相に轉ぜられることなく、有爲轉變の娑婆世界がそのまゝ、寂光安樂國となる。一心即ち佛心である。個々の現象即ち清淨法身である。四祖道信禪師が牛頭山の法融に示して

境縁に好醜なし、好醜は心より起る。心若し強ひて名けずんば妄情何れよりか起らむ。妄情既に起らずんば真心の偏するに任せむ。汝但心に隨つて自在なれ、復た對治することなき、即ち常住法身と名く、更に變異あることなし。

と言はれて居るのはまさにこの道理を明したものである。「草よ木よ汝に示す今朝の露」の一句もこの境地に至つて始めて透得すべきものであらねばならぬ。

盤珪禪師に隨參して既に心要を明めた貞閑禪尼は、禪師が住院地なる播州網干の龍門寺の傍に草庵を結んで不徹庵と號し、盡くるなき法喜禪悅に飽滿してゐた。朝々夜々、草に木に置く千顆萬顆の玉の露をそのまゝに、千百億蓮華上に現する千百億の釋迦とも拜したことであらう。遠近の道俗この得法の禪尼を慕うて、來り教を請ふもの

も少くなかつた。法弟子と稱する婦女子尼衆の數三十餘を以つて算へられたといふことである。

其の圓寂は元祿十一年八月、世壽六十五であつた。其の長子は家を嗣ぎ、次ぎの三人は皆また出家した。其のうち一人は後に龍門寺に住し、盤珪禪師の後を襲うたと。

蓋し、禪は春の如く、文字は即ち花なり。春は花にあつて全花是れ春。花は春にあつて全春是れ花。而も禪と文字と二ありといんはや。
——石門文字禪

其二 園女

眞妄不二——山神と樵夫——眞の眞相——園女と雲居和尚——果して眞悟か——永嘉と長沙の語——俳人としての園女——岡西惟中に配す——芭蕉翁に相見——その晩年——その奇行——その辭世

白い布に墨がついたのは汚れである。紺紙に胡粉がついたのも汚れである。けがれに定まつた性は無い、地の色と違ふのを汚れといふのだ、と言つた人がある。面白い語である。

白に對して黒、紺紙に於ける胡粉、黑白相對して始めて淨いもの汚れたのといふ、黒に黒の自性なく、白に白の自性のない時、何を以て淨いものとし、何を以て汚れたものと言ふことが出来よう。清濁といひ、大小といひ、長短といひ、方圓と云ひ、皆上への姿かたち兩々相對する上の比較の名で、自性本來定まつたものではない。眞妄といひ、迷悟といふも亦同じである。

或る山奥に一人の樵夫が在つた。人里離れた山の中で、聞えるものはたゞ空谷谿流の響、寒鳥野猿の聲の外は、何にかへす己が木を伐り割る音ばかりである。そこへ一日珍らしく訪ふ客があつた。それは其の山の神であつた。樵夫は孤獨寂寥に堪へない時のこととして、歡ぶこと限りなく、及ぶ限りの饗應をした。それは冬の寒い頃であつた。樵夫はイン／＼と立ち働きながら時々ハア／＼と兩手に息を吹きかける。山の神怪んで「それは何をするのだ」と訊く「これは寒い時人間がよくすることで、斯うすると指頭の凍え融んだのを暖め醫すことが出来る」と答へた。いよ／＼御馳走が出来て共に箸を取り上げる段になると、樵夫はポツ／＼と湯氣の立ちのぼる羹を啜るにフウ／＼と息を吹つかけるのを見て「それは何をするのだ」と、又山の神が訊く「これも人間がよくすることで、斯うすると熱いものが程よく冷めるのだ」と答へると、山の神勃然として怒り出した。「貴様前刻には息を吹つかけて凍えたものを暖めると云ひ、今は却つて熱いものを息を吹つかけて冷ますといふ。貴様の云ふことは何が眞だか知

れやしな。貴様は大妄語を吐く奴だ。貴様のやうな奴と誰が交際ふものか」と憤々してそのまゝ歸つて了つた、といふ西洋の昔話がある。凍えた指に息を吹つけて暖めるのは眞であつて妄でない。熱い羹に息を吹つけて冷ますのも妄でない眞である。羹の熱い、指の冷たい、その冷と熱相對の處から考へて、一方が眞なら一方妄でなければならぬやうに思つたのが山の神の見解であつた。

千差萬別の待對の上に定まれる眞相ありと思ふ凡夫の迷情は、此の山の神の見解に他ならぬ。事相の上から云へば熱いのが宜い場合がある、冷いのが可い事もある。熱からず冷からぬのが宜いものもある。冬の夜更けに、寒さに胴慄ひしながら蕎麥屋に跳び込んだ時の天麩羅蕎麥は熱い上にも熱いのが可い。夏季三伏の眞晝喉の焦げつく渴を醫するビールは冷い上にも冷いのが可い。目に青葉山ほととぎす初鯉、クビリく小酌を取り上げる時の澤の鶴は熱からずぬるからぬ爛の程が可い。それく皆眞で、元來眞の眞相は一事一物に固定したものでない。固定してゐないものを固執する

のが凡夫の情量で、彼此相對の差別に差別を施し、我他相互、是とし非としてをさささりがつかない。

眞といふも、もと妄に對するの名で、相對の眞は眞未だ眞の眞でない。所謂妄は元より去らねばならぬが、妄を去つて是れが眞だといふ眞も未だ取るべきでない。事毎に執着するのは迷だと云つて、迷を打破して成程と悟つた、其の悟りに固着して居るのも未だ眞の悟りでない。

往き盡してバッテリー川の岸に出た時、サア向うへ渡らねばならぬが、あたりに橋も見えぬ、舟もない。彼方此方と迂路々々してゐる。徒に迂路々々してゐたのでは、いつまでも前へ進むことは出来ない。人に尋ねるか、自分で見付けるかして橋なり舟なりを得た、成る程是れで向うへ渡れるわいと安心が出来た。が、所詮橋を渡り切るか、舟を乗り棄てなければ向う岸の人となることは出来ない。謂ふ所の妄を執し迷ひに陥れる人とは、岸の此方で迂路々々してゐる人、謂ふ所の眞を見た悟を得たといふ人は、

ハハア是れで渡れるわいと、橋の中途で腰を下ろし、若くはヤレ有り難やと舟を守り
 安心してゐる人、共に向う岸へ達することは出来ない。妄を去り真も棄てる、ソコに
 全眞の境地がある。全眞現成の處、去るべき妄もなく、求むべき真もない。總ゆる相
 對差別の見地を躑躅すると、ソコに絶對無碍の天地が在る。一たび絶對の天地に逍遙
 して、還り來つて總ゆる事象に觸れて見ると、運歩括捉、事々物々悉く真にあらざ
 るはない。蓋し禪理の窮極するところ、正にこゝに存するのである。
 女流作家としてわが俳諧史上にその名を飾れる園女は、よく此間の消息に通曉して
 るたものと認められる。彼女が當時の善知識雲居和尚に贈つて答へた手紙の文は、是
 れを證して餘りあるものである。

來書の趣拜見申候。下求眞不妄は大道の根源、誰も存ずる所、憚ながら珍
 しからず候。一心源頭に立つての所作、柳はみどり花はくれなる、唯そのまゝにし
 て常に句をいひ歌を綴つて遊び申候事、無益の業ならば、一切經も無益の業にて

候。法臭き事は嫌ひにて我が平日の行は念佛と句と歌なり。極樂へ行くはよし、地
 獄へ落つるは目出たし。

和ニ玉韻

自己念其不覓心。清燈已耀一燈心。市中點々有明鏡。全識人間清淨心。
 誰か見ん誰か知るべき有るにあらず

無きにもあらぬ法のともし火

之れで見ると、雲居和尚から「眞を求めず妄を求めず」といふことに就いて指示が
 あつたらしいが、園女はそんなことは「誰も存ずる所、憚ながら珍しからず」と豪語
 して居る。即ち總ゆる差別見は疾くに打ち破つて、眞妄民絶の絶對境に撞き進んで居
 つた者であらう。そして更にその絶對全眞の處から萬事に應同して所作無碍自在の消
 息を叙べては「柳は緑、花は紅そのまゝに常に句をいひ歌を綴る云々」といひ、「法臭
 きは嫌ひ」だといひ、「極樂も好し地獄もめでたし」といふに至つては、全眞流露、適

くとして可ならざるなき胸次をそのまゝ伺はしめて居る。和韻の詩は、前二句が差別の窠臼を踏襲して、真だの妄だの、求むべき影も止めぬ一心明澄の容子をいひ、後二句で差別即平等から更に平等即差別の玄理を現はさんとしたものと見られる。歌も同じ様な意味で、有にあらざる無にあらざる、されど亦有にあらざるにあらざる、無に有らざるにあらざる、と云つた様な、太だ要領を得ぬものゝやうであるが、上に述べた真妄相對絶對の間に於いて參究して始めて要領が得られるのである。

禪理を曉了することは、古人が身を抛ち命を捨て、道を訪ひ師を尋ね、血の涙を漉ぎ熱誠丹心を披いて苦慮焦心した勝躅に照して見るも固より容易でないことを知るべきである。一婦女の身で此の境地に到る修養の刻苦は察するに足り、歎服に價すると言つて可からう。而も園女果して玄理妙致に於て徹底して餘す所なきを得たかどうか、そは今こゝに點檢の限りでない。永嘉大師證道歌に曰ふ「絶學無爲の閑道人、妄想を除かず真を覓めず」と。また長沙の岑和尚が皓月供奉に示す偈に曰ふ「假有本と有に

非ず。假滅亦無に非ず」と。正に好し園女が説似言句は是れと同工異曲を作す。園女たる者須く大寂定中の兩箇老漢に向つて直に親しく問取し去るが可い。

園女は伊勢松坂の人、渡邊某といへる神職の女であつた。資性風流、幼少から和歌が好きであつたが、後に俳諧を杉田勾當望一の門に出でた美津女に學んで漸く佳境を究めた。

夜あらしや大閣様の櫻狩

有る程の伊達を盡して紙子かな

手をのべて折りゆく春の草木かな

負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉

などは人に稱せられる佳作である。當時の俳客に備前の人で岡西惟中といふ人があつた。談林風の祖、西山宗因の門人で、井原西鶴や田代松意や前川由平などと、同門の兄弟である。園女は此の惟中と知己になつたが、惟中が大阪へ移る頃共に往つて其の妻

となつた。或る時かの俳聖と云はれる松尾芭蕉が京阪地方を行脚して來たのを聞いて、夫婦は特に招請して懇に饗應した。その時芭蕉翁は、園女の立居振舞の如何にも嫺雅恭敬なるを感じて

白菊や目に立て、見る塵もなし

と吟じて示すと、園女すかさず

紅葉に水を流す朝月

と脇句をつけたといふ。前の「負うた子に……」などの句を透して見ても、また芭蕉を感じしめたといふ話によつて徴しても、當時の彼女が如何にも女性的な繊細な情緒を有つてゐたこと、併びに淑やかに慎ましやかな佳人であつたことが想像される。夫の惟中に死分れて後、元祿二年の冬に江戸に下つて芭蕉翁に随侍して學んでゐたが、翁の歿後は一年京洛に遊び、復た江戸に歸つて深川に在住し、眼科を以て生業としてゐた。深川八幡境内の歌仙櫻は彼女が植ゑたもので、もと彼女が植ゑたものすべて三

十六株であつたのが、だん／＼枯れて無くなつたのだといふ。

元來俳人だの茶人だのといふものは、多くは脱俗洒落の風があるものであるが、俳人でそして禪に參じた園女は、世故俗事には一向無頓着であつた。袖下の紅絹を切り取つて下駄の鼻緒にしたり、張文庫の蓋を以て厨の水ながしに代用したりする奇行もあつた。歳六十で名を智鏡と改め、天窓を圓めたが、真中に十筋ばかりの髪の毛をチヨンポリ残してゐた。人々怪まぬものは無かつたが、其の如何なる理由があるのかを問うて見ようと思つても、彼女の端然たる威風に壓へ付けられるやうで、何人も終に滑稽なる髪の毛存在の意義を確めることが出来なかつたといふ。

園女の死んだのは、享保十一年の四月で、行年六十有三、或は七十四ともいふ。墓は深川靈巖寺念佛堂の傍に在る。法名は香林院詠譽妙園信女、淨土宗の戒名である。彼女が前の手紙の中にも「平日の行は念佛と句と歌となり」とあるより見ても、禪にも參じたが、もと淨土門の信者でもあつたらしい。それで淨土宗によつて葬送された

のであらうか。辭世にいふ

秋の月春の曙見し空は

ゆめかうつゝか南無阿彌陀佛

それ天地は風雅なり、萬象も亦風雅なり。此風雅は佛祖の肝膽なり。造化に随つて四時を友とす。見る所花にあらずといふことなく、思ふところ月にあらずといふことなし。心、月にあらざれば禽獸にひとしく、形、花にあらざれば夷狄に類す。夷狄を出て禽獸を離れて造化に歸れよ。

—松尾芭蕉

其三 千代女

禪の不立文字——眞理と言語文字——禪と文學——南嶽六祖に謁す——貞室と芭蕉——千代女
女廬元坊に學ぶ——文學の妙趣——女らしき情味と俳味——その出家——酒脱の風車——一念三千の句

禪は教外別傳と稱し、不立文字を唱へる。それはすべての教相を棄てる、一切の文字を用ゐぬといふ意味ではない。文字言説はもとそれ自身が眞理そのものではないので、眞理は如何なる文字、如何なる言句を以てするも言ひ盡されるものではないとし、その言句文字の得て盡し難いところを、丁度、火に觸れて熱い、水を飲んで冷いと自知するやうに直に體得するといふのが禪の宗乘とするところなので、文字言説は猶ほ月を標すの指、標した指に眼を留めてゐたのでは明月を賞するの目的は達せらるべくもないが如く、文字言説によつて道に入るの方向を知つたならば、文字言説を離れて直にその道を體得せねばならない。といふ意味から不立文字を標榜するに外ならない。

しかしながら如何なる真理妙諦もこれを言ひ顯はさんとならば、どうしても言詮文字に依らねばならない。而も今いふ禪の立場からすれば、妄りに文字言詮を弄し呂列するのでなくて、言ひ難きを言はんとして文字を假りるに外ないのであるから、その文字は多く、簡潔で含蓄ある詩賦の類が用ひられて居る。つまり一超直入、宇宙の秘機、自然の靈妙を諦觀し感得した味ひは、たゞ歎美するほか、たゞ詠嘆するほか、何らの表示すべき言語も文字も無いのである。

その信仰的なる鑑賞的なるに於いて全く異なるものであるとはいへ、宇宙の靈威自然の真相に觸れて之れを永詠する、歎美するといふ點に於いて、禪と文學とは其の趣きを同じうするものである。即ち禪の極致は知解情量を以て批議付度すべからざるが如く、文學の妙趣も理窟解釋を以ては到底味はれるものではない。兩者にこの一味の點があればこそ、不立文字を標榜する禪が却つて最も文學に富んだ宗旨で、その典章偈頌語録を看れば言々句々みな玉を聯ね錦を綴る文學的奇觀を呈して居るのである。

し、また洒脫な氣韻のある妙文學には、隱約の裡、どこか禪味を帯びたものゝ多いところが認められるのである。

南嶽懷讓禪師、始めて六祖大鑑慧能禪師に見えて教を請うたとき、六祖は先づ問うて言つた、「什麼より來る」南嶽は正直に「嵩山より來る」と答へた。六祖は直に本問題を出した。「什麼物か恁麼に(其様に)來る」南嶽は此問題解決に非常な苦辛をした。そしてまた六祖の前へ出る毎に「何物か恁麼來」と問はれ、種々の對へを重ねたが、毎時も允可を得ることが出来なかつた。工夫專思八年の後、次の問答によつて遂にこの關を透過するを得た。「什麼物か恁麼に來る」「説似一物即不中」「還つて修證す可きや否や」「修證は即ち無きにしもあらず染汚は即ち得ず」「只此の不染汚諸佛の護念する所なり」南嶽はこゝに大悟徹底を證明されたのである。南嶽が大悟の胸次、其慶快、手の舞ひ足の踏む所を知らざる境地は、如何なる言語も之れを説似することが出来なかつた。故に「説似一物即不中」と言つたので、禪の極致が文字言詮の及ぶ所

ない一例として見らるべきものである。文學の妙所に至つても同じ趣きのあることは、かの貞室が「これはく」とばかり吉野山」と咏嘆し、芭蕉が「松島や松島やあゝ松島や」と歎美した例に見ても知られるが、女流作家として噴々の俳名を謳はれた加賀の千代女にも、まさに之れが好適例を示した事實がある。

千代女は加賀の松任で福増屋六兵衛といふ表具師の女である。幼少時代から風流の志があつて俳諧を好むのであつたが、片田舎で然るべき師匠の得られないのを悲しんでゐた。その比、芭蕉門下十哲の一人を以て稱せられた支考の門人で美濃の廬元坊が名聲を遠近に馳せてゐた。千代女はこれを慕うて往つて學ばうと思つてゐると、丁度廬元坊が諸國行脚の序に加賀へ廻はつて來たので、大に喜んで早速その宿を訪ねて、年來の志を述べ切に教を請うた。その時廬元坊は、旅路の疲れて既に寝てゐたが、この一少女の熱心な請ひに感じて室に入れ、兎に角一句を詠んで見よ、と言つた。折しも首夏の頃であつたので、題はさしあたり時鳥と定められた。

千代女は苦もなく一句を吐いた。廬元坊は一見してこの女たゞものでない、と先づその氣韻に感じたが、わざと、「これは月並の句だ、誰にでも出来る、再考して見よ」と言つた。千代女は更に一句を吐いて見せた。が矢張り肯はれなかつた。廬元坊はそのまゝ眠つてしまつた。けれども千代女は尚ほ枕頭に坐つて苦吟してゐた。さうして廬元坊が一寸眼を覺ました間を伺つては詠み直しの句を呈した。斯うして夜明けまでに數句を作つたが、みな師の意に充たなかつた。そのうちに廬元坊は起き出で、「まだ去なずに居つたか、あゝ、もう夜が明けたのぢやな」と驚いたやうに言つた。その時千代女は、すかさず

ほととぎすくとして明けにけり

と口吟んだのを聞いて始めて會心の笑みを浮べ「それぢやく、その意地を忘れずに修行すれば必ず世に名を擧げられうぞ」と非常に賞めそやし、そこで師弟の約を結んだといふ。苦心に苦心を重ね、推敲に推敲を加へて千句萬句を吐くとも、徒らに文字

の上に技巧を弄するのでは文學の妙趣は得られない、といふ例として見るに足る逸話ではないか。

千代女その修行の始めに於いてこの良工の鉗鎚に接し、先づ俳句の根本精神に於いて觸着するところがあつて、その精神を本として陶冶され鍛錬したのでつひに彼の高名を博するに至つたと謂はれて居る。彼女が十八歳で金澤の表具師福田彌八に嫁いだとき。

しぶかるかしらねど柿の初ちざり

と詠んで、新郎に示し、また二十五歳でその良人に死分れたときの句に

起きて見つ寝て見つ蚊帳の廣さかな

とある如きは、情味と俳味と並せてやさしい女性らしい言ひ現はしてある。

花もなき身はふりやすき柳かな

は、如何にも脱俗的な俳人の胸中を示して居る句であるが、彼女は既に良人に分れ、

のち一人の男子に家を嗣がしめて、女の二十八歳、最早花もなき身として心安く俗事をふり捨て、尼となつたのである。

尼となつてからは素園と號し、別居して専ら菩提の行願に精進する傍ら風流韻事に悠々たる風懷を遣つた。彼女はまた書を越後の巽俊明に就いて學んだのであつたが、矢張り一種の風韻ありとしてその俳諧と共に世に持て囃されるに至つた。曾てある人が、書を上にして下に讀をしたものを書いてくれと頼んだに對し、朝顔が長く上から垂れた書をかいてその下に、

朝顔や地につくことをあぶなかり

の句を書きつけて與へた。その趣向も句もあもしろい。また治く人の知るところのかの、

朝顔につるべ取られてもらひ水

の如き、すべて温い潤ひのある、女流らしい趣きのある句を多く詠んで居る。

彼女の名聲は一時に廣まつて世に稱揚されたものであつたが、あるとき、さる高貴の人に召されて出たことがあつた。殿中の侍女たちは、千代女とは如何にも優に美しい名である。詠みすてた句もすべて優に美しい。定めてその人も優に美しい容姿であらうと、まだ見ぬ前から種々な想像や噂で騒いで待つてゐたが、眼の前に現はれた千代女は、想像の外の外に醜い太つた女であつたのにみな失望の顔を見合せた。さうして、はしたない若い女たちの、袖を口に覆うて忍び音にクス／＼失笑するものさへあつた。慧眼な千代女は直にそれと悟つて、

一抱えあれど柳はやなぎかな

の一句を詠んで、今更のやうにみなを感歎させた。凝滞なき洒脱な風事が想見されるではないか。

また越前永平寺の長老から、一念三千の意を句に作つて見よといはれたに對し、
千なりや蔓一すぢの心から

と即座にやつてのけて稱讚を博したこともあつた。禪と文學との趣きに於いて一致した點がある爲めか、出家して常に佛乘に心を傾けてゐた爲めか。俳味に於いて風流な襟懷を養うてゐた千代女は、また禪味に於いて超脱な道風に契當するところがあつたと謂へるではあるまいか。

こゝろも終日おぼ

詩に別材あり、書に關するに非るなり。

詩に別趣あり、理に關するに非るなり。

— 嚴滄浪

畫趣禪趣

池野玉瀾

畫は無聲の詩——浦上春琴の論畫詩——玉瀾の素性——大雅と玉瀾の爲人——畫人としての玉瀾——和歌を冷泉家に學ぶ——榮辱を顧みず——夫婦の參禪——同唱同和——大雅の奇行——酒脱中の眞情味——似たもの夫婦

古來、禪僧に繪畫の名手を多く出して居る。さうして一般の名匠の筆端に透れる墨痕には墨痕以外のある精神——いはゞ一種の禪趣——がある。詩は有聲の畫、畫は無聲の詩といはれる位で、藝術としてのその妙致に至つては、畫は元よりすべての文學と全く同じ趣を有つたものである。即ち詩禪一味、俳禪一味が謂はれる如く、畫趣禪趣に於いてもまた同様に謂はるべきは當然である。浦上春琴が畫を論ずるの詩に、
學畫與禪同。 結跏或多年。 敗筆難成像。 動即墮狐禪。 不知在魔界。
畢竟是何緣。 一因天分低。 一因名利纏。 讀書問古人。 忘我求自然。
と言つて居るのはまことに吾が意を得て居る。この見方から例を引くならば古今の畫

人に就いて多くを擧げることが出来ようが、今女流禪中の一人として求むるならば、畫人でさうして禪者であつた玉瀾女史の如きは最も恰好の例でなければならぬ。

玉瀾はかの有名な畫家、池野大雅の妻で、同じくまた畫人傳中の一人である。その母は、京都祇園の茶店の女で聞えた歌人であつた梶子の養女百合子である。百合子も、梶子には及ばなかつたが亦和歌を能くした。百合子、江戸の浪士徳山某と通じて一女を生んだが、のち徳山は妻と女とを捨て、江戸へ歸つてしまつた。一女は即ち玉瀾で、名は町と云つた。玉瀾は斯うして父無し子として母一人の手に茶店で人と爲つたのである。

玉瀾や、長ずるに及んで頗る才情に富み、界限の評判娘であつた。母百合子は、どうか立派な男を得て配偶としてやりたいと手を盡して物色するのであつたが、容易にその意に適つたものが見つからなかつた。その頃、大雅はまだ一寒生で、自ら書いた書畫を賣つて僅かに口を糊するといふ状態で、近所合壁から輕侮嘲笑の的になつて

ゐた。が百合子はひとり見る所があつてその愛娘を以てこの見るかげもない一寒生に妻した。果して百合子の眼識は外れなかつたのである。

大雅はのち妙手の名を天下に擅にするに至つたが、人と爲り蕭散恬虚、貧富榮辱に累はれず、その行跡には畸人傳中の材料とせられるやうなものが少くなかつたが、玉瀾亦資性閑静しかも衣裳粉粧を顧みることなく、蕭洒な舉止云爲すべて良人の行實とよく配合するものであつた。書を良人に學び、また柳里恭の教をも受けて妙處に入り、多くは山水を好んで畫き、頗る風韻雅致ありと稱せられた、殊に蘭竹梅菊はその得意とするところであつた。

彼等夫婦はまた冷泉家の門に入つて和歌を學び、共に歌人としても稱せらるゝに堪ふるほどの域に入つてゐたと傳へられて居る。玉瀾が始めて冷泉家に入門する日のことであつた。冷泉家の侍女たちは當時評判の女流才子が來るといふので、定めて優れた風采で出て來ることであらうと、多大なる期待を以て互に屬目してゐたが、玉瀾の

到るを見ると、身には洗ひ洒しの木綿衣を着、手に魚籃を提げて丁度町家の下婢が使ひにでも出て歸つて來たといふやうな風貌であつたので、みな意想外の感にうたれ驚きの眼を睜つた。彼女が俗世間の榮辱を意に介せざるの風は多く此の類であつた。

大雅はまた當時の善知識白隱禪師が、四方に應化してしばらく京都に錫を止めて居られたのを慕うて往つて親しく參叩した。さうして白隱が學人接待の手段として有名な、かの隻手の聲を參究してつひに了得した。

耳豈得聞隻手響　耳能沒了尙存心
心能沒了尙難得　却識師恩不識深

は大雅が省悟の時呈露した一偈だといはれて居る。而して總てに於いてその良人に和し、その良人に學んだ玉瀾は、矢張り良人に從つて共に白隱に參じた。その參禪に關する詳しい話頭は傳はつてゐないが、亦よほど深く玄理に造詣したものであつたと謂はれて居る。

大雅は好んでよく名山に遊び、峻として登らざるはなく、奥として究めざるはなく、登臨するところ必ず千景萬狀、悉く之れを筆端に收め、以て古今畫工の及ぶ能はざる妙致を成し得たといふことであるが、その家に居るときは、終日一室に在つて夫婦共に紙を展べ筆を執つて畫をかき、或は酒を置き歌を詠んで互に唱和し、或はまた夫が三絃を執つて錆び聲で掻き鳴らせば、妻は古びた筑紫箏を弾じて之れに和し、屋根破れて雨漏れ、釜甑屢々空しといふ風であつても曾て意とせざるもの、如く、別に一壺の天地に安住して雍々の諧樂に俗人の知らざる限りなき満足を得てゐた。

豪放な、洒脱な、物に拘らない天才的な大雅には、常情から飛び離れた奇行逸事が澤山傳へられて居るが、曾て難波の地へ赴くとて京都の家を出たが、肝心の専門用具たる畫筆を携へることを忘れた。あとで妻の玉瀾が氣がついて、之が無くてはどんなに困るだらう、と急いで後を追かけ、やつと追いついてそれを手渡しすると、大雅の喜びは非常なもので、そしてその感謝の表情も亦非常であつた。「お、あなたは

誰方でごさる、御親切千萬忝けない、これなうてはさしつめ大きに困るところでござつた」と、全く自分の妻の顔を知らないものゝやうに言ふのであつたが、玉瀾は別に怪しみもせず、黙つて筆を渡し、そのまゝ別れて家へ引つ返したと。夫が夫なら妻も妻である。まるで嘘のやうな、話しのやうな、正に畸人傳中の人たるに充分な資格ある彼れらが逸事の一例である。

玉瀾曾て冷泉家から贈り物として前垂を賜はつたことがあつたが、それによつて自分の幼少時代、それから母の名残りも想ひ出されて、その前垂をかけた姿をしばらくかの茶店に現はしてゐたことがあつたといふ。これらは、彼女が洒々脱俗世間人事に係らない風があつた裡にも、さすがに眞面目なやさしい女らしい情味を有つてゐた俤を偲びしむるものである。

大雅は安永五年四月十三日、平安な永き眠りに就いたが、玉瀾はそれより數年後れてまた安詳として大往生を遂げた。

俗に「似たもの夫婦」といふが、其は大雅と玉瀾の間に恰も適用されるべき語である。玉瀾は最もよく大雅を理解し、さうして其の風尚に於いて、その藝術に於いて、また其の精神生活に於いて、全く能く一心同體なるを得た。二人は斯うした諧和の生涯を送り、書趣と禪趣との裡に限りなき快怡と満足とを得てゐたのである。

凡そ書畫を見るに、たゞその着色のみを見て、その筆を着けざるところに趣あるを見ることを知らざるものは、眞に書畫を見るものにあらず。

—安積良齋

山河大地鳥の聲

お三

夙に鐵文禪師に參ず——雞鳴を聞いて大悟す——承陽大師の説破——釋尊の獅子吼——眞理は純一平等——迦葉舞を作す——佛祖と同唱同道——お三の機鋒——白隱禪師とお三——趙州と尼——是か不是か——お三の辭世

お三は、信濃國伊那郡七久保村の人であるとばかりで、その氏索性や、生死の年月や、すべてその世間的生活に關した行實は未だ詳でない。

夙にふかく心を禪の機要に寄せてゐたが、當時曹洞の正師家として盛に門風を擧揚してゐた鐵文道樹禪師に相見してより、親しく隨參して工夫辨道を專にした。二六時中、觸處觸目、寸隙なき勇猛精進をつゞけた。

曉の大气は暗中に生動し、萬象を深い眠りから蘇らせようとして、清新の氣が身内に滲透するやうな時であつた。お三は例ものやうに夜を通して面壁端坐、牆壁の如くに工夫の三昧に入つてゐた。更闌け漏殘し、靜寂として身邊動かざる淵の如く、恍惚と

山河大地鳥の聲

して腔内一氣澄徹する處に至つて、忽ち曉告ぐる金雞の第一聲を聞いた刹那、豁然として迷妄の桶底を打破した。而して次ぎの一首を口吟んで其の慶快の胸次を表はした野も山も花も我が身も鳥の聲

何か残りて聞くといふらむ

承陽大師は、「食に於いて等なるものは法に於いても亦等なり」と、等の一字を提起して一切皆等、一法究盡の道理を説破せられた。釋尊は曉天の明星を見て開發悟道せられた時、大地の有情非情同時に成道す、と獅子吼せられた。眞理は絶對である、純一である。平等である。

乾達婆王が釋尊に藥を献じた時、琴を執つて彈ずると、佛弟子迦葉は絃の音に應じて起つて舞をなした。王は佛に問うた。「迦葉尊者は大阿羅漢で、すべての煩惱は悉く斷滅せられて居ると思ふのに尙ほ更にこの餘習を殘して居られるか」「イヤ迦葉には決して餘習はない、妄に法を誹謗してはならぬ」と、佛は答へた。ソコで王が復た琴

を彈くこと三たびすると、迦葉起つて舞ひをなすこと亦三たびした。「世尊よ、迦葉は舞ひをなす、尙ほ是とすべきであらうか」王は斯う問はないではならなかつた。佛が「迦葉は決して舞ひをなさぬ」といふや、王はいよく解らなくなつて更に「佛は決して妄語せられぬ筈ぢや」と云つた。此の時の佛の垂示に「王よ、決して妄語でない。汝が琴を撫する時、山河大地木石盡く琴聲を發する。琴聲に應じて迦葉が舞ひをなすの道理も知るべきである。迦葉舞ひをなさずとの語の意義も解すべきである」とある。

琴の聲を聞いて起つて舞ふ迦葉の心行は何か、乾達婆王が琴を撫すると、山河大地木石盡く琴聲を發するは何の消息か、世尊成道して何故に有情非情同時に成道するか。食等法等一切皆等とは何を意味しなすか。そは一法究盡純一無雜の第一義に誦當する那人のみあつてこゝに點頭すべきである。恐らく、阿三の參禪はこれら話頭と親しき交渉を有つて居るものである。雞鳴第一聲を聞いて「野も山も花も我身も鳥の聲」と

なり切つた悟りは、まさに従上祖佛と同唱同道底の面目があると謂はれるではあるまいか。

お三たび鐵文の爐鞴に入つて眞金を領得してより、鋒芒鋭雋、天下の耆宿久參と雖も之れと問答商量して敗闕し去る者が多かつたといはれて居る。

「駿河には過ぎたるものが二つある、一に富士山二には白隠」と謳はれた臨濟下の巨匠白隠禪師が、請する者あつて信州へ應化したことがあつた時、お三は早速往つて相見した。機略縦横の老和尚と、たゞ者ならぬ老婆と、狸奴と白狐の出合ひか、いづれ手練手管の一芝居が演出されること、衆徒はひとしく目を睜つた。お三婆さんがずうツと前むと、白隠老漢ひよいと隻手を舉げて見せた、とお三は、

白隠の隻手の聲を聞くよりも

兩手をうつて商ひをせよ

の一首を以て應へた。隻手の聲如何に聞くべきか、兩手をうつて商ひをするが何の佛

法か、作家初對面の挨拶は餘人には解らない。

白隠禪師また自ら一枚の繪をかいとお三に與へた、お三見ると無造作に竹箒が一つ畫いてある。直ちに筆を執つて、

日本の悪知識を掃くは、

先づ第一に原の白隠

と題して禪師に示した、禪師は何も云はず、たゞ微笑された。これらにも此の婆子の活機が躍動して居るのが見られる。

趙州從諗禪師といへば、公案に屢く出て來る支那の有名な善知識で、六十歳始めて發心出家し、われ知らざることは三尺の童子にも頭を下げて教を受けよう、吾れ知れるとは八十の老翁といへどもこれに教へよう、と言つて専心に修行し、行脚二十年、八十歳にして南泉禪師に法を嗣ぎ、それより百二十歳まで施設縦横、親切に道俗を教化したといふ珍しい祖席の英傑である。一人の尼があつて、あるときこの老趙州に一問

を發した。「如何なるか是れ密々の意」趙州は何も云はずに「チョツと尼の袖を引つばつた。スルと尼は「和尚にも矢張り這箇が在る」と言つた。趙州はまた「お前に却つて這箇が在る」と言つた。

帚の圖を書いて老婆に示した白隱、尼に一搯を與へた趙州、二作家抑も何の作略を弄したのか、白隱に毒吐いたお三婆は何の道理を見得たらう。趙州の一搯を皮肉つた尼は何の佛法を行得したらう。更に白隱の微笑は何を穿却し、趙州の鸚鵡返しは何を證明したのであらう。會か不會か、是か不是か、端的もとより言詮批議の及ぶところでない。

お三既に年老い、病いよ／＼革まるといふ時に臨んで、その枕頭に集つた兒女縁類の者等は、この得法の老婆の末期にみな熱い涙を濺いで永久の別れを惜み嘆いた。そして、何か遺言を是非にとせがむのであつた。

言の葉のつゆも残らぬ世の中に

いかなることをいふておかまし

最後の微笑か老婆の唇に浮んだ。やがて、從容として永えの眠りに入つた。つゆも残らぬ言葉に、意路不到の理を言ひ遺したのである。

天地と我と同根、萬物と我と一體にして、微塵ばかりも別の物なし。溪の聲も風の音も主人

公の聲なり。松の青きも雪の白きも主人公の色なり。我手をあげ足を動かさし、色を見、聲を

聞くものと全く別ならず。

——拔除禪師

閃電光擊石火

慧昌尼

俱胝和尚と尼實際——慧昌白隠に參ず——山梨了徹の省發——了徹白隠に見ゆ——慧昌了徹を撈着す——慧昌了徹再度の商量——青州布衫の話——頓珍漢——低聲々々

昔、支那の務州金華山に住して居た俱胝和尚は、凡そ參禪の徒が來て如何なる問を掛けても、いつも一本の指をヒョイと出すのみであつた。俱胝一指頭の禪と云つて禪林に有名になつてゐる。初め住庵の時、尼實際といふものが、笠を冠り錫杖を持つて庵へ訪ねて來た。笠を冠つたまゝ、錫杖をチャリン／＼鳴らしながら、俱胝和尚の端坐してゐる周りを三返匝つて、さて前に立つて言つた。「和尚何とか言ひ得たら笠を取らう」呆氣に取られたか、狼狽へたか、俱胝は啞のやうに固くなつて一語も出ない、尼は同じやうに三度繰り返して問うたがつひに對へは得られなかつた。で、「さらばぢや」とばかりそのまゝ出て行かうとした。「暫く」と引き留めて「尼よ、最早日の暮れぢや、兎も角今夜は吾が庵に一宿せられよ」といふとまた「和尚何とか言ひ得たら宿らう」

といふ、俱胝は矢張何とも對へが出來なかつた。實際尼はそのまゝ出て行つて了つた。俱胝大に慚愧し、自ら志を激勵して開悟徹底を誓つた。丁度その翌日天龍和尚が庵に來たので具さに先の實際尼の一話を舉示して教を請うた。天龍は何も言はずにたゞ一指を豎て、示した。機縁の圓熟したものか、俱胝はハツと電氣の通じたやうに領悟することが出來た。所謂彼の一指頭の禪の淵源である。

これは支那の話であるが、わが國の慧昌禪尼も、彼の實際尼の再來であるかと謂ひたい位ふかく禪要に徹してゐた。慧昌は駿州江尻驛の某氏の妻であつたのが、後に髪をあらして尼となり、原の松蔭寺に白隠禪師を叩いて熱心に精進辨道し、つひに徹底大悟することが出來た。

同じ頃、同じ駿河國庵原の豪族に山梨平四郎治重といふ人があつた。了徹居士と號し亦白隠門下の英俊である。その始め性豪快を好んで小事に拘らず、平常酒色に溺れて歌舞歡笑を事とするといふ風で、殊勝らしく佛法を信する者を見ては口を極めて罵

り嘲るのが常であつた。それがあつた時妻妾を携へて豪華な舟遊をした際に、偶と水の
上の泡沫を見て不思議に無常觀に打たれ、家に歸つて後、一人の老翁が屋後で澤水
尙の法語を讀むのを聞いて心ひそかに感悟する所があつた。それから深夜萬籟寂とし
て人の心のおのづから澄み定まる所を選んで、齒をくひしぱり眼を張つて、箇の事を
明めずんば死すとも休まずとの決心で、端坐工夫を凝らした。一夜つひに手の舞ひ足
の踏む所を知らずといふ慶快の境地に到達することを得た。早朝白隱禪師の松蔭寺を
訪れた。先づ禪師の隻手の聲を聞いて更に數番の問答を交はし、初めは未在更に道へ
と斥けられたが、最後に「連日の細雨如何が留め得て一滴も漏らさざるを得む」との
問那一着を透過して禪師の微笑を博し得た。

白隱禪師が微笑して休んだといふので、了徹は、「三世諸佛の大道吾れ徹せり」とば
かり喜び勇んだ。禪師の門下に飽參底の女流として慧昌の名は高かつた。了徹は早速
尼の庵室を訪うて自分の工夫の徑路、禪師と相見の因縁を具さに示した。「居士よ、少

しばかり得る所があつたからとて足れりとしてはならぬ」老尼は劈頭先づ毒舌を弄し
て、「私は今はもう斯の通り老耄して居る。人の手を假らねば起つこともならぬ。恐れ
入るが居士どうか隻手を動かさずして老尼を起たして下され」と言つた。了徹居士は
初對面にこの意外な老尼の一撈を受けて、まるで頭上に大鐵錘を下されたやに氣壓さ
れて了つた。軀は釘付けにでもされやうに、唇は縫はれでもしたやうに茫然自失たゞ
の一語も對へが出来なかつた、慧昌は疊みかけて言つた。「居士よ、早々にし去ること
を休めよ、向きに、言つたのはこの事、少しばかり得る所があつたからとて足れり
としてはならぬ」了徹は、苦慮焦心、悶々の胸を抑へながら悄々と松蔭寺に引返す
より他なかつた。

了徹の眼を追つて慧昌も寺へやつて來た。そして白隱禪師の前に出て今の庵室での
話頭を擧示して、山梨どの、悟道發明、まことに大慶に存じます」と賀辭を陳べ、
禪師と顔を見合せてカラ／＼と晴れやかに笑ふのであつた。笑ひ聲の未だ消え去らぬ

折り、忽然として了徹が室内に入つて来た。そして言つた。「老禪尼、適來は錯つて敗闕を容れた。が、試みに今一度問ひを繰り返してみられよ」で、慧昌は「居士よ、雙手を動かさずして老尼を起たしめよ」と前と同じ商量を始めた。了徹が所見を提示すると、慧昌は舌を吐いて大に驚いた。そのとき白隠禪師は親しく青州布衫の話といふ一則の公案を擧げて、「是は祖々相傳の秘訣である、謹んで仔細に參究せよ」と謂つて了徹に授けた。

青州布衫の話といふのは、ある禪僧が趙州和尚に「萬法一に歸す、一は何れの處にか歸す」と問うた時、「我れ青州に在つて一領の布衫を作る、重きこと七斤」と、趙州は取つても付かぬ答へを與へたといふ有名な公案である。つまり、高い天も、廣い地も、河も海も野も山も、草も木も、蟲も鳥も、千態萬狀の現象はたとへば水の上の起伏高低せる千波萬波で、風静り波定まれば會て一滴を増さず一滴を減ぜざる同一味の海に歸して了ふその如く、渾然として會て相對差別なく平等の一本體界に歸する。

それが萬法一に歸するの道理、この道理は解つたが、さてその一本體はそれならどこに歸するか、といふのが禪僧の問意である。どうも萬象と一と待對の見を脱し兼ねて居る。萬法といへば萬法につきまはされ、一といへばその一を持って餘して居る。一といふも未だ純一なるを得てゐない。その迷妄の窠臼を打破せんが爲めに趙州老漢は殊更に萬法とも一とも答へない。「老僧が青州といふ處にゐた時、一枚の布衫を拵らへたがな、イヤその重いこと七斤さ」といつた調子の答で、問ひと答へと全然頓珍漢である。

頓珍漢なことをいふのが禪の機要だと早計をされては困る、情量分別を以て知らうと思つてもこの公案の眞意義は到底わからない。たゞ知らんと要する者は親しく實參實究して徹底するより外ない。若しこゝに言々句々之れを舌に妄評し、筆に批議するならば、恐らくは彼の尼實際の毒手に觸れることを免れないであらう、恐らくわが慧昌老尼の大笑を如何ともすることが出来なからう。低聲、低聲、叱！

超佛越祖の機 お察

白隠門下傑出の女居士——處女の希望——法華經を尻に藉く——大なる自覺——向上一義の見識——佛に唾する行者——丹霞聖僧の頂頸に騎る——丹霞木佛を焚く——鶉の眞似する鴉——皓布襪——白隠の探竿——眞參眞悟——その結婚——その禪機——老僧を折倒す——鏡——清失利——孫の死を痛哭す——頂門の一針

白隠禪師の門下には、女流にして得法有力の者が頗る多く出て居る。察女の如きは、そのうちでも、最も傑出した一人であつた。

察女は駿河原宿で白隠禪師の族叔に當る庄司氏の女である。高德白隠の如き人の同族として、その偉大なる風化には幼少より接してゐたことも多大であつたらう。亦彼女自身の天性もたしかに尋常婦女子の儔ではなかつた。

年は二八かにくからぬといふ、花ならば蕾の、まさに春の媚風に笑み初めんとする、その十六娘となつた時、察女はつらく自ら考へた。「自分はもとより花の顔もなく

雪の肌も有たぬ。が、幸に四肢五體缺けた所もなく、世間人並の娘となつた。最早縁時も近づいたわけだが、どうか相當な佳い婿を得て幸福な身の上になり度いものである」と、尋常誰にも見る處女の希望に燃えた。そこで程遠からぬ赤野の觀世音に祈願を籠め、高王觀音經を讀誦するのを日課とした。専念淨信を以て裁縫の間も洗濯をするうち、口の中で間斷なく念誦するのであつた。同じことを熱心に五六日つゞけた。と、ある時ハツと悟る所があつた。それきり誦經はバツタリ止めてしまつた。

ある日察女の部屋を覗いて見た彼女の父は、殆ど見るべからざるものを見たやうに驚いた。それは、毎日頂戴讀誦してあれほど有り難がつてゐた法華經に、あらうことか傲然と腰をかけてゐる察女を見出したのであつた。「コレ、佛の御本懷を説かれたと申すその貴き法華經に、たゞさへ罪業深重の女人ばらの、而も腰うちかけるとは何事ぢや。畏ろしい冥罰を蒙らうぞ」と叱り且つ諭すと、「お父さんにはお解りでありませうが、妙法華經と私のお尻と何の異りがありませう」と平氣な顔で居る。父は

「マア途方もないことをいふ。お前は氣が狂れたのか」と、いよく驚いて了つた。察女のこの言行は果して狂氣の沙汰とすべきであらうか。もと禪の悟りとは、大なる自覺に外ならない。「佛法を學ぶとは自己を學ぶなり」と教へ、「本來の面目に相見せよ」と示し、「本地の風光を徹見せよ」など、説く、皆な自覺の謂である。自己の本面目を省悟するのである。佛は宇宙の眞理を體得したといふが、吾々五尺の一身は直に亦一個の小天地で、その悠大靈妙に參交して居るではないか。宇宙天地の靈威と、佛の妙徳と、吾々の活機と、本來脈絡貫線平等一理に歸するの道理があるではないか。若し克く自己の本面目を省悟する者は一超して此の一理に撞入する。即ち佛と吾と何の異なる所があらうとの大見識がそこに豎立するのである。一人の行者があつた。法師に隨つて佛殿に入つたが、禮拜をしないのみか、安置の佛像に向つて頭から唾をひつかけた。法師は驚いた。「コラ貴様はまだ近頃寺へ來たばかりの未戒の行者ではないか。何の得る所があつて大それた佛に唾などをする」と叱

責すると、「師よ、まさに無佛の處に到り得て始めて私に唾をなされ」と對へた。自己本來佛、自己の外何れの處に佛があるか、といふ見識であらう。法師は此の行者を如何ともすることが出来なかつた。

丹霞の天然禪師が馬祖道一禪師に謁した時、僧堂に入ると突如聖僧の項頸に騎つた。聖僧といふのは僧堂の中央に安置する文殊菩薩の像である。一山の衆徒は新來の此の亂暴僧に驚き呆れてしまつた。が、馬祖は微笑んで「吾が子天然に下り來る」と曰つた。スルと丹霞は跳び下りて禮拜をなし「虔んで名を賜ふことを謝す」と曰つた。丹霞また曾て洛の惠林寺に於いて、時、嚴冬で寒さ骨に徹するといふ日であつた。「おゝ寒い」と本堂から佛の木像を持つて來て薪代用に焚いて暖つて居た。院主は見えて「途方もないことをする」と、眼を噓らし聲を勵まして怒つた。丹霞は平氣なもので、「イヤ實は佛身を茶毘して舍利を得ようといふ處だ」といふ。「馬鹿な、木佛ぢやないか、何で舍利が得られようぞ」といへば「舍利のない佛なら焼いたからとてさう責

めるにも及ぶまいと、いよ／＼平氣なものであつた。

これらの大見識は固より徹底の大機にして始めて得られるので、鶉の真似をする鶉であつてはならない。一步を過されれば當面に蹉過し了る。悟り損へば所謂禪天魔である。

斯ういふ話頭もある。玉泉承皓禪師は心要を發明して大自在三昧を得て後、一筋の犢鼻褌を作つて、それに歴代祖師の名號を書き列ね、而して帶の上に「文珠と普賢とのみあつて些子に較れり」(些子は些少の義)と書いた。當時皓布衲と稱して叢林に喧傳されたものであつた。一人の僧がまた之れに倣つて同じものを作つた。玉泉は見て「汝何の道理を具し得て戯事を敢てするぞ。恐らく血を嘔くこと無量であらう」と痛く詭つた。その僧は果して後に多量の血を吐いて死んだとある。

妙經とわが尻と何の異なるところがあらうと豪語した一少女、果して何の道理を見得たのか、何の見識を豎立したのか。鶉か鶉か、観る人の眼を以て観なければ解らな

5。

「どうも少し變です、あまり信心に凝つて氣が狂れたのぢやないかと思はれます。何か和尚様に良い方便はござりますまいか」父は早速松蔭寺に白隠和尚を訪うて詳しく娘の言動を話し、そして斯う言つて頼むのであつた。「よし／＼拙僧には手段がある。マアこれを持つて歸つてお察の部屋の壁に粘つて置きなさい。彼奴視て何といふか」と、白隠和尚は一首の歌を書いて渡した。父は歸つてその通りにした。歌は忽ち察女の眼に止まつた。

やみの夜に啼かぬ鳥の聲きけば

生れぬ先の父ぞ戀しき

しばらく視つめてゐた彼女はやがてニッコリ笑つた。そして何の事もないやうに言つた。「これは白隠和尚の書かれた歌に違ない。和尚も矢張りさうかな」父はいよ／＼怪しく思つてまた松蔭寺へ往つて委細を告げた。之れを聞いた白隠もニツと笑つた。そ

して「兎も角一度お察をこゝへ伴れて来るがよい」と言つた。
 父に伴れられて白隠の前に出た察女は、和尚から様々な詰問を受けたが、少しも凝滞することなく一々流るゝ如く答辯した。ソコで白隠は更に一つ二つの古人の話を示した。彼女はしばらく思惟考究してゐたが、即答が出来なかつた。白隠は「歸つて親しくこの因縁を實參實究せよ」と言つた。五六日間彼女は彼女が殆ど寢食を忘れて精進工夫した。そして復た白隠の前に出たときは、それらの因縁を見事に透過することが出来た。そして大我慢を生じて、白隠が更に向上の一路を示したのを肯はないて大に抗辯した。白隠はつひに竹篋を揮つて叩き出した。
 察女は精進工夫いよく勇猛につゞけて怠らなかつた。そして省發するところありと思ふ毎に白隠の室に參叩した。が、いつも前の如く竹篋で叩き出された。斯やうにして半歳ばかりの後には、古今の諸訛、東西の葛藤を盡く參究してつひに白隠の允可證明を得た。

寄る年波の父は、早く初孫の可愛い顔を見る老後の安心と樂しさを冀つた。併し察女は固く辭して煩さく勸める婿取りのことを肯げなかつた。白隠和尚は爲めに懇ろに諭して言つた。「お前は最早佛法に於いて徹底したてはないか。徹底して見れば佛法と世法と何の異りがある。佛法として取りわけ願ふべきもなく世法として一向に嫌ふべきもない筈ぢや。固より婚姻は男女の大義、人倫の大本、優婆夷（在家の信女）としてそこに立派に佛法が踐み行はれる。たゞ父の意志に従つて孝道の實を見せるがよい」察女は唯々として聽從した。幾程もなく良縁を求めて結婚した。そして一家の婦となつた後も餘暇を見ては松蔭寺へ往つて悟後の修行を怠らなかつた。
 ある日例ものやうに白隠の室を叩くと、丁度その時、輪扁といふ禪僧が白隠に見えてその省悟の見解を呈示してゐるところであつた。白隠まづ一擲を與へて「虚空輪得するや」と言ふと輪扁は何も言はずに手を以て虚空に一個の圓を描いた。白隠はこれを見て「尙ほ是れ半片」と點檢した。スルト側でこの問答を見てゐた察女が「適來（前

刻)すでに輪得し了る」と一轉語を下した。白隠は深く察女の一語を首肯した。——
虚空を輪にすることが出来るかといふ問題、ハイこの通りと輪を描いて見せたら、それは輪の半片だ、も片一方はどうした、といふ。スルと側から、先刻にチャンと立派な輪が出来て仕舞つて居る、と口を出したら、ウム然うだ、と承諾したのである。

またある時一人の僧が察女に問うて言つた。「芥子中に白石を裂く、是れ什麼の道理ぞ」察女は突如前に在つた茶碗を取り上げて一撃に打ち砕いた。これらの問答、一體何の消息を漏らしてゐるものか、もとより猥りに素人の情量知解で揣摩することを許さるべきでなす。

またあるとき、白隠が一則の話頭を擧げて、「お前はこの因縁をどう解するかと、云ふと、察女は恍けたやうな風で「もう一度聞かして下され」といつた。白隠が前と同じやうにその公案を擧示した。それが終るか終らぬうちに察女は叮嚀に兩手を支へて頭を下げ、「和尚御苦勞、謹んで御禮申上げます」と言つた。白隠は「惜しいこと、老僧

今日この真娘の爲めに折倒せられた」と言つて休んだといふ。

昔、支那の越州鏡清寺に順徳禪師といふがあつた。此の和尚は屢く參問の僧と商量して最後には「鏡清今日利を失す」の一句で止めをさすのであつた。ある時も一僧來つて「辯じ得ず提起ささる時如何」と問うたに對し「争でか這裏に到ることを得んや」と一應の答を與へた。その僧は言つた。「慙麼ならば(然らば)則ち禮拜し去らむ」すると順徳禪師は例の如く「鏡清今日利を失す」と云つた。

同じ公案を二度繰り返さして「和尚御苦勞」と謹んで謝辭を述べたお察は、彼の僧が師家の一答話を聞いて「そんなら禮拜しませう」とやつたのと、その機全く一途に出で而も恐らく彼れに一步を輪すべきであるまい。而して「今日折倒せらる」といひ「今日利を失す」といつた兩個老漢の接得ぶりもまた殆ど同軌に出で、居る。敗けた敗けたといふ老僧の手段、うつかり乗つたら大變だ。問者も問者なら答者も答者、何れにしても眉唾ものである。

察女の峭峻にして滑脱な禪機はおほむね斯の類で、世の諸禪徳が、その一婦女たるを侮つて、その辛辣の毒手に觸れ、酬唱往々にして敗鬪を容れたといふことである。されば白隠和尚の高足なる遂翁禪師は、「先師老漢の下には在家の信女で見地明白に悟道した者が多かつたが、中でもお察婆の如きは久參の衲子も遠く及ばざるものがあつた」と稱揚して居る。

察女その晩年に孫女の早世するに出遇つたが、その哀悼悲傷の状は他の目も氣の毒なほどであつた。隣りの一老翁がいろ／＼と慰めて且つ言つた。「そなたは日比白隠和尚に參禪して疾に見性悟道せられて居るといふではないか、生者必滅、老少不定の道理など、今更拙老が申すのは釋迦に説法ぢや。何でその様に泣き悲まれるぞ、佛法を悟つたといふ人がそんなでは世の人が何と謂ふであらう。その邊のことも少し考へねば……」と言はせも果てず、「馬鹿な！」と、察女は一喝を與へて言つた。「禿翁が、何を知らう。嫗が哭き悲む涙の一滴は、孫の爲めには香華燈燭あらゆる手向けにも優し

て功德になるのぢや」老人は一言もなく遁げるやうに出て往つて了つた。

世態人情を度外して別に禪の境界ありと思ふ所謂枯木禪無心禪に籠頭する死禪和子の爲めには、お察婆の此の一語はまさに頂門の一針たるべきものであらう。彼の、庵を焚き僧を逐うた婆子の因縁の如きも、この一語を了解して始めて參透すべきものであらねばならない。

察女は七十六歳で、電の長空に激するが如かりし生涯を一期として、浪の大海に停まるやうに、その家で兒女親族圍繞の裡に安らかな永き眠りを取つた。乗炬の大導師は遂翁禪師であつた。其の引導の法語は斯うであつた。

七十六年驚夢去。一踏踏破盡閻浮。

世の中は三分五厘梅の花

——物外和尚

箔ぬりの佛も人の案山子哉

——環溪禪師

唯心の淨土己身の彌陀

原宿の老婆

鳥の見かた虫の見かた——萬法歸一の理——萬象獨立の法——萬物相關の道——最善最良の國土——先づ一心を明めよ——白隱の説法——老婆の徹悟——白隱に一掌を與ふ——趙州の筭——唯我獨尊の機——黃檗羅漢を罵る——臨濟の生理——解脫文珠を打つ——人々眉毛眼上に横る

ある人の書に「鳥の見かた虫の見かた」といふ西洋の諺が引いてあつた。高く蒼空を翔る鳥が下瞰した眼には何が映るであらう。山がある、野がある、田園がある。萬家の薨を列ねた街がある。炊煙立ちのぼる疎らな草屋がある。道路が蜿蜒として長蛇を形作つてゐる。河川は幾條の帯と流れ、湖海は大小の鏡と點する。無數の人畜車馬船舶が此彼に蠢動してゐる。之れらが一眸に直視される、宛然一つの大きな繪巻物を展べたやうに、その美觀はいふべからざるものであらう。これに反して常に地べたを匍匐ひまはつて居る蟲は何を見るであらう。眼を上げて仰ぎ見るところ何がある。

草木の下には多く蝕み汚れた葉うらを見る。それから、下駄の裏、足の底、人の尻の穴、床の下など、すべて陰れた汚い裏面ばかりを見る。

この世界を以て苦しい娑婆だと云ひ、厭ふべき穢土だといひ、これを忌みこれを厭うて別に遠き天國極樂の欣求すべきものありとする人は、人世の悲觀的一面のみを見て居るもので、丁度穢い裏面ばかり見て居る蟲の見かたである。私達は鳥の見方をしなければならぬ。高く眼を着けて観るならば、宇宙は一大靈妙の存在で、この國土は最良最善の黄金世界と見ることが出来るのである。

其處には萬法歸一の道理が在る。風來つて水を蕩かせば此に高低し彼に起伏する限りなき波頭も、一たび風收まれば動かぬ油のやうに、澄み切つた鏡のやうに萬里一碧の裡に消えて失くなる。吾等の眼に見る萬別千差の一切の現象も、且らく縁に隨つて現はれた姿形で、畢竟渾然として一本體に歸するものである。

其處には萬象獨立の原理が在る。一樣に是れ水であるとはいへ、男波女波となつて

は或は高く或は低く千態萬狀決して一樣でないやうに、一切の現象平等に本體に歸するといふも、森々羅列雜然たる萬象は、その形相に於いて截然として決して彼此相冒さざる各自獨立の存在を保つものである。

其處には萬物相關の法則が行はれて居る。千波萬波は一碧同味の水、同一味の水をのまゝ千波萬波と現はれる。水を離れて波なく、波そのものも水である。男波女波は相率る相依つておなじ水の上におなじ水が起伏して居る。そのやうに、總ゆる現象は一本體そのものが種々の形に現はれたもの、箇々の現象はその形は千差萬別だがその體に於いて一脉貫線して、箇々の獨立そのまゝに融然として共同諧和の存在である。

これを哲學的に見るならば、この宇宙自然の全態が一大真理の顯現である。これを審美的に見るならばこの天地間の現象は無上極美の展開である。これを道德的に見るならばわれらの世界は最上至善の表彰である。眞善美の理想境に在つて知情意の求

むるところを自由に満足することが出来る吾々は慶快この上もない身ではないか。

知情意の心の働きに於いて正しきを得ないものは憐むべきである。知は何を見る、眞にあらざして偽。情は何を感じる、美にあらざして醜。意は何を斷ずる、善にあらざして惡。さうしてこの世界を穢土とし、この身を凡夫とし、遠くに天國極樂を憧憬し、遙かに神を呼び佛を念ずる。歸一平等、自己獨立、自他調諧の自然の大なる道理を諦観しないからである。先づその迷妄の知解情量を去れ、而して明かに自己を知れ。一切現象は一本體の現はれたといふ以上、自己も亦本體の外に別存するものでない。宇宙自然の靈威は亦自己一身の靈威ではないか。天地世界は眞善美の表彰であるといふ以上、一少天地たる自己の身心何が故に偽惡醜のみとする。自然がそのまゝ清淨法身ならば、各人亦各々一小釋迦ではないか。此の國土がそのまゝ最善最良の淨土であるならば、吾が足の踏むところ吾が手の觸るゝところ何れか穢土の厭ふべしとするものがあらう。

先づ一心を明めよ、心の迷妄を去れ。心迷へば人世は一個の牢獄となる。悟ればこの世界、天の樂園にも勝る。故に遺摩經には「佛智慧に依つて佛土清淨なりと見る」と説き「心淨ければ國土淨し」と示されてある。また六祖慧能禪師は「唯心の淨土、己身の彌陀」と言つて、十萬億土と説く彌陀の淨土も、實は此去つて遠からざる道理を教へられた。禪の修行、開發悟道といふも、この一心を明め自己を知るの道に外ならぬ。徹底して自己を知るは迷妄を拂ひ去つた所謂佛智慧による。佛智慧によつて自己を見るとき、淨き心を以て國土を見るとき、宇宙の靈威は即ち自己の靈威、脚痕直に寂光淨土を踐み、身邊おのづから清淨法身の大光明を發つてあらう。

白隱禪師が住してゐた駿河の原宿に一人の老婆があつた。白隱の徳風を慕うて常に松蔭寺に詣で、その説法を聴くのであつた。ある時例ものやうに法筵の末に列つて熱心に聽聞してゐた。機縁の熟したものが、ハツと氣のついたことがあつた。その時の白隱の説法は次のやうなものであつた。

「唯心の淨土、己身の彌陀、彌陀一たび現すれば山河大地草木叢林、一時に大光明を放つ。若し人識得せんと思はゞ、たゞ自己方寸の上に向つて單々に尋ね覓めよ。既に是れ唯心の淨土といふ、淨土に甚の莊嚴を作すか。已に是れ己身の彌陀といふ、彌陀に何の相好があるか。」

老婆はこの説法を聞いて深く反省するところがあつたのである。「淨土は自分の一心に在る、彌陀とは吾がこの身ぢやといふ。一體自分の心身は何ものであらう」と、氣が付いたのである。そして彼は考へた。「是れはさう難しいことではあるまい、もと／＼自分が自分のことをよく識ればよいのだから」と、家に歸つてから熱心に工夫練心を始めた。それこそ寢食を忘れるといつたやうな勇猛精進をつゞけた。ある日水端で鍋を洗つてゐたとき、不圖した機みて豁然として眞の自己に逢着し得た。そのまゝ鍋を放下つて置いて急いで松蔭寺へ往つた。そして直に白隱の室を叩いて「婆々は今日己身の彌陀に出會ひ申した。和尚の説かれた通り山河大地草木叢林悉く大光明

を放つ、妙々」と歡喜踴躍するのであつた。白隠が勵聲一番「ナニ山河大地草木叢林悉く大光明を放つとな、ぢやがお前の屎坑裡も矢張り光明を放つかどうぢや」といふと、老婆は前んで白隠に接近して突如掌を以てビシヤリと一つ撲つて「者老漢未徹在」(このぢい夫熟者め)とやつた。と、老婆の一手を受けた白隠は呵々と晴れやかに高笑ひをするのであつた。

昔支那にも恰度斯んな禪機を帯びた一老婆があつた。かの趙州和尚が路で向ふから一人の老婆が来るのに出會つた。作家の眼識に直にそれが尋常の婆々でないと見て取つたものか、「おい婆さん何處へ往くと先づ探りを入れて見た。果してこの婆々曲者であつた。「今から趙州の筍を偷み取つて來ようと思ふ所ぢや」といふ。「ナニ、趙州の筍を偷みに往くと、若しも途中でその趙州老僧に出逢つたらどうする」と詰ると、婆さんは何も言はずに突然ビシヤリと一手を與へた。老趙州はそのまゝ休し去つたとある。

本來の自己は最尊最貴である。一たび本來の自己に相見したものは、壁立萬仞の勢

唯我獨尊の威を振ふものである。古人にその例が少くない。二三を擧げて見よう。黄檗希運禪師は身の丈七尺、堂々たる風采で、機鋒また鋭雋を極めた一代の豪傑僧であつた。まだ諸方を行脚してゐた時、途に眼光炯々たる一人の異僧と伴れになつた。ある河の濱に出た。河には橋もなく舟も見えない。その異僧は少しも顧慮する所なくスラ／＼と陸をゆくやうに水の上を歩いて往つた。そして河の中央でちよつと佇つて此方に向き直り、「黄檗よ早く來い、何をして居るのぢや」と、手招きするのであつた。スルと黄檗はその魁偉の容貌に怒りの眼眸を光らせて、「おのれ羅漢と知つたなら、早くその脚を叩き折つてやつたものを……」と云つた。水の上の異僧は忽ち禮容を調べて「眞に是れ大乘菩薩僧の器」と、讚歎して掻き消すやうに消えて失くなつた。

この黄檗の法を嗣いだ臨濟義玄禪師も亦その師に譲らぬ銳機の人であつた。ある日

臨濟は鑿を以て地を鋤いてゐた。向ふから黄檗がやつて來た。これを見た臨濟は鑿を杖にしてそこに立つてゐた。禪苑に在つては如何なる時に於ける如何なる事をもすべて捉へて問題とし、自己の實參實究に供するが常である。この時黄檗も黙つて素通りはしなかつた。「這漢困れたのかな」と相手にしかけた。挑まれて黙つて居る臨濟でない。「鑿も擧げずにゐる、どうして困れよう」と應じた。黄檗は持つてゐた棒を振り上げて打ち下ろした。スルと臨濟は猛然としてその棒を引つたくつたかと思ふと一送に黄檗を送倒して了つた。黄檗は倒れたまゝ、聲をあげて維那（僧堂取締の役僧）を呼んだ。「維那、早く來て俺を起せ」維那が扶け起して、「和尚は何故この風癡漢の無禮を容されたか」と言ふと、漸く起きあがつた黄檗はもの言はずに維那に一棒を喫はした。臨濟はそんなことには構ひなしにグン／＼地を鋤き始めた、そして傲語した。「世間ではみな火葬する、俺のところでは一時にみな活埋にしてやる」

解脱禪師は文殊菩薩に心印を傳はつたといはれて居る。すでに道を得て後、大衆に

侍し自ら謙卑つて精進をつゞけてゐた。毎朝衆の爲めに粥を營辨るのであつたが、ある時忽然として大釜の上に文殊菩薩が現はれた。解脱は知らん顔で振り向きもしない。と、「吾は是れ文珠」といふ聲がする、解脱は粥を攪き交ぜる大筥を振りあげて真向に打ち下ろした、そして言つた。「文珠は自ら文珠たり、解脱は自ら解脱たり」文珠は偈を説いて讚嘆した。「苦瓠連根苦 甜瓜徹蒂甜 修行三大劫 却被老僧嫌」

歴史的事實として認め得らるべきかどうかは姑く措き、即身是佛、自己の光明蓋天蓋地なるべき向上の一路を示した斯の類の話頭は非常に澤山ある。妄りに氣を負ひ奇を弄するのが禪機だと心得てはならない。併しながら、當下に自己の本眞を確保し得たとき、そこに一步を譲るべき師もない、他はおのづから他、吾はおのづから吾、本来眉毛眼上に横はる、未だ會て他の面目を假るものでない、三世諸佛も一口に吞盡するの見識を堅立せねばならない。

唯心の淨土己身の彌陀

一五四

天下の老和尚趙州に對し、一代の善知識白隱に向つて、克く一掌を與へた彼の老婆此の老婆の禪機は、蓋し本分の事に於て些子に當れり、と謂はれ得るものではあるまいか。

西方といふは。衆生の心地なり。十万

億の佛土を過ぐるといふは、衆生の十

惡の念をやむると、菩薩の十地の階級

を越ゆることなり。阿彌陀とは衆生の

佛性なり。觀音勢至等の聖衆とは自性

の妙用なり。

——靈山和泥合水集

言詮不及

原宿茶店の婆子

周金剛——餅賣婆の禪機——徳山始めて龍潭に參ず——經に依るべからず經を離るべからず

——何れか姉妹——白隱の道を得——白隱參徒を激勵す——趙州勘婆——鐵火箸頭の禪機——

上智下愚を論ぜず——一超直入の妙機

徳山の棒、臨濟の喝と並び稱せられ、共に機鋒峭峻、作略辛辣を以て祖席に獨歩した英傑である。この徳山がその始めは經律の法師で、廣く諸經の深旨に通じ、精しく律藏を究め、特に金剛經の玄理を明けて常に人の爲めに講説するのであつた。その俗姓が周氏であつたので、時人稱して周金剛と謂つた。その金剛經に於いて如何に得意であつたかも知られる。曾て同學の者に向つて傲語した言句に「一毛海を呑むも海性虧くることなし。織芥鋒に投ずるも鋒利くして動ぜず、學と無學と唯我焉れを知る」といふのがある。如何にその力量を自負してゐたかも知見られる。あるとき南方の禪席頗る隆なりと聞いて憤然として起つた。「凡そ出家學道の者、千劫にも佛の威儀を

言詮不及

一五五

學び、萬劫にも佛の細行を學び、而も尙ほ容易く成佛することを得ぬ。然るに、南方の禪者は教外別傳直指人心見性成佛と説く、是れ魔子外道の類である。好し、我直にその魔窟を撞き族類を勦滅して眞の佛法を宣揚し佛恩に報いよう」と、衝天の意氣を以て金剛經の鈔疏を肩にし、郷國蜀の地を後にはるく、灤陽の地へと出て來た。

禪苑の誰彼片端から説き伏せてやらうとの壯志を懷いて出て來た徳山は、路傍で一人の老婆が油餅を賣つて居るのに出會つた。長旅に脚も疲れてゐた、腹も減つてゐた、早速肩を息め腰をおろして貪るやうに餅を求めた。ところがこの婆々たゞの露店の餅賣ではなかつた。おいそれとは賣らない。「御出家は餅を買つて何になさる」と、解りきつたことを問ひかけた。「何にするつて、點心にするのさ」(點心といふのは猶ほ晝食といふやうな意味) 老婆はまだ餅を出さない。「何です、一體その荷物は」と更に別の問ひをしかけた。徳山は得意氣に「金剛經の鈔疏さ、周金剛とは拙僧のことぢやよ」と言つた。ソコで老婆は始めて本音を吐いた。「御出家よ、婆々に一つの問ひがあるが、

答へが出来たら點心を施してあげよう、若し答へが出来ないとならばお氣の毒ぢやが他處へ行つて下され」と前置きして「金剛經の文に、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得、とある。御出家は今點心すると言はれるが那箇の心を點ずるのかな」徳山のキツと結んだへの字口はいつまでも釋けなかつた。金剛經を以て天下を横行することが出来るとの自負心も我慢も、この一老婆の爲めに根柢から打ち崩されてしまつたのである。やがて「婆さん、お前は何處でその法を得た。近處に甚麼な宗師が居るか」と問はざるを得なかつた。老婆は、こゝから五里ばかり行くと龍潭といふ優れた禪師が居ることを教へた。

徳山は龍潭を訪うて種々問答を試みた上始めて禪の妙味を知つた。そして龍潭の親切な提撕によつて忽然として思量言詮の外第一義に徹することを得た。その時徳山は今まで唯一の虎の巻として擔ぎまはつてゐた彼の鈔疏を法堂上に持ち出して「諸の玄辨を窮むるも、一毫を大虚に致くが若く、世の樞機を竭すも一滴を巨壑に投ずるに

似たり」斯う言つてそれを悉く一炬の下に焼き捨て、しまつた。徳山の一棒活殺自在、縦横の機略天下を風靡したのはそれからのことである。

屢々言ふ通り、直に本来の自己を認め、親しく宇宙の靈機を體得する禪の第一義からするときは、法門八萬、經卷五千四十餘といふも、すべて門を敲くの瓦、月を標すの指、指に眼を留めてゐては天邊の大月は眺められない。瓦を抱いて門前に彷徨うてゐてはいつまでも門内輪奐の堂宇を知ることが出来ない。指を離れ眼をあげて直に空靈真如の光りを認め、門を敲いて訪れ、扉が開いたら直に瓦を捨て、入り莊嚴の殿堂に昇る、それが教外別傳の宗旨である。故に禪の修行といへば不立文字を標榜して經文の講說義解を事とせず、この身を直指しわが本性を見得して、この身本來佛なることを直覺すべく専ら練心の工夫を修めるのである。經を講じ義を解すること彼の徳山の如きであつても、一たび路上の餅賣婆さんの詰問に逢うて、恰も瀬戸物の巾着のやうに口を開くに由なかつたのは、たゞ經を講じ義を解することのみを事として、自己

本分の事には没交渉であつた爲めに外ならぬ。古人が「經に依て義を解すれば三世諸佛の仇」と戒めたのは痛切な箴言である。併しながら禪機は閃電光擊石火である。毫釐の差、つひに天地懸隔を免れない。故にまた戒めていふ、「經の一字を離るれば却つて魔説に同じ」と、路上の餅賣婆さん能く天下の學者僧を啞の如くにやりこめた、禪の悟りもとより何でもないと、勿々にし去つてはならない。瓦を棄てよといつたからつて、始めから戸を敲かず瓦を棄てよといつても門は開かない。指に眼を取られるなどいつたからつて、横を向き下を向いてゐたのではつひに月を見ることが出来ない。

遠き支那の、古い話は且らく措いて、こゝに近く日本で、もつと新しい寶曆明和の頃に、その得法の力量に於いて彼の餅賣婆さんと姉妹にもして見たいやうな婆さんがあつた。

婆さんの生死の年月等一切詳でない、その名さへ分らない。たゞ駿河の原宿の、

とある茶店の婆さんであると知れて居るだけである。原の松蔭寺には白隠禪師が盛に禪風を擧揚し、洽く道俗男女を教化して居た。こゝにいふ茶店の婆さんはその頃の人である。そして白隠門下には省悟師の旨に合うた女居士が少くなかつたが、この婆さんも亦そのうちの一人で、夙に禪師の提撕に接して専心工夫の上、名もなき無學の老婆でありながら、教外別傳の宗旨を參得してゐた。

白隠の會下には四來の參徒雲の如く集つた。みなこの大善知識の下に開示悟入を得ようといふ何れ劣らず渾身の精力を傾倒して熱心に親參實究するのであつたが、人の機根には上下がある。また上根大機といへども因縁純熟しなければ向上の一路、まことに達せんとして達することは出来ない。雲見水弟互に研鑽琢磨することを懈らなかつたが、省發旨に合つて師の證明を受くるといふ者は極めて少かつた。多くは擬議思惟の窠臼裡に陥ち込んでゐて出身の活路を見出すことが出来なかつた。さういふ連中を見る毎に白隠は「生死事大、無常迅速ぢや、そんなとていつになつたら得脱が出来る。」

と、嗟き悼んで且つ「マア門前の茶店の婆さんの許へ往つて參禪して來るかよい」と激勵するのであつた。

茶店の婆さんの許へは屢く參禪の僧が訪れた。眞乎婆さんの教を受けようと思つて來る素直なものもあれば、耄れ婆々何程のことかあらん、乃公一番かの趙州勘婆に倣つて嚴しく勘破してやらう、といふやうな意氣込みで機を問はしに往くものも少くなかつた。序だから、趙州勘婆の因縁を擧げて見よう。

支那の五臺山は、文殊菩薩の淨土だなど、傳へられた靈域で、無著禪師曾てこゝに住し、禪林に於いては重く用ひらるゝ所である。その麓に一人の老婆が居つて、往來の人を接待するのであつたが、行脚の僧が通りかゝつて臺山の路を尋ねると「幕直にお出でなさい」といふ。僧が少しばかり行きかけると老婆は「立派な御出家が矢張り左様して行かれる」と言ふ。凡そ僧が路を問ふ毎に必らず同様の問答をするのであつた。永年この通りであつた。一人の僧が諸方を游歴して趙州和尚に見えたとき此の話

を傳へて妙な老婆だと言つた。趙州は、よし老僧が勘破してやらう、と直に出かけて往つて見ると果して老婆が接待してゐる。「婆さん臺山へ行くにはどう往つたらよいかな」と尋ねて見た。「幕直にお出でなされ」老婆の答へは豫て聞いた通りであつた。趙州が少し行きかけると果して老婆が言つた。「立派な御出家が矢張り左様して行かれる」趙州はそのまゝ住菴へ引つ還して來た。そして直に大衆を集めて説法の高坐に陞つて言つた。「老僧すでに諸人の爲めに臺山の婆子を勘破したつた」と。趙州は豫て聞いた通りの老婆を見て、豫て聞いた通りの他の僧の如くにして空しく引つ還して來たまてである。老婆子の「幕直にお出でなされ」の一語に何の響きがあるか、老趙州は何を勘破したのか、言詮不及のところ、まさに高く眼を着けて實究を要する點である。

原宿の茶店の婆さんの機鋒は、かの五臺山の老婆よりも鋭かつた。しかも訪れ來る禪和子にはかの老趙州を學び得る者は一人もなかつた。先づ僧の入り來るを見るや婆さんが口を切つた。「參禪にお出でかな」「左様」と答へると、「這裡へ御入りなさい」と

屏風の陰に引つ込んで招く。僧が屏風の中へ入ると婆さんは直に一挨拶を與へる。僧が何とか言はうとして口をモグ／＼して居ると、婆さん突差鐵火箸を振り上げて叩き出して仕舞ふ。多年諸方の叢林を行脚して幾多の善知識に歴參した有道の衲僧でも、動もすればこの鐵火箸の御馳走を振舞はれて、散々な不覺を取つて逃げ出した者も多くあつた。婆さんの得力人に過ぎて大に作家の手脚を具してゐたことが想ひ見られるではないか。

永平初祖は坐禪の義を普勸して斯ういつて居られる。「上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ふこと莫れ。專一に工夫せば正に是れ辨道なり。修證自ら染汚せず、趣向更に是れ平。常なるものなり」と、禪の法もと自己の本分を認め得て本來の佛性に安住するといふに在る。一切衆生悉有佛性とは佛教の根本思想である。一切の人に具有する異なるなき一様の佛性を見出す上に上知下愚も知人鈍者もあつたものでない。本性を啓發すれば名もなき一老婆も天上天下唯我獨尊である。學識一世に高き徳山も路上の餅

賣婆さんの一問を如何ともすることが出来なかつた。五臺山の老婆、原宿茶店の老婆、何れも行脚舊參の専門修行僧をして顔色なからしめた。難行か、易道か、一超して直に如來地に入る、といふ禪の妙機は蓋しそこに在ると謂へるであらう。

各々我等が只今何の了簡もなく筒様にして

打向ひ居る當體みな悉く佛なり。畢竟佛と

は何を云ふぞとなれば、妄念惡念なく安心

の胸中にさつばりとしたる所が佛なり。

——大道禪師

大 疑 行 政 女

殘酷なる運命の手——脱首座に始めて禪要を聴く——趨向の標的——大疑行——心理學者の
説明——非思量底——恍惚として寢食を忘る——悄然としてわが子の名を問ふ——珍寶の客
——智慧の光明——白隱の認許——その禪機

政女も、また白隱門下女流參徒の一人である。おなじく駿河で比奈村の杉山某の妻であつた。柔順な貞淑な良妻で、やがて一人の愛兒の慈母であつた。夜毎川の字形に互に結ぶ恩愛の夢も濃かに、美き家庭の幸福はしばらくつゞいた、併しながらそれは眞に夢に過ぎなかつた。頼みがたき幻滅の人の世の運命は殘酷に彼女からこの家庭の柱を奪ひ去つた。彼女は所天を失うて、あとに遺兒を擁して淋しく寡居する身となつたのである。

政女は平素から佛法信者であつた。それが面たり、人生無常の痛手に逢うてからは、ますます佛を禮拜すべく寺へ運ぶ足も繁くなつた。

比奈村には無量寺といふ臨濟派の寺があつて其の頃は脱首座といふが住持であつた。脱首座はかつて清見寺の陽春に随侍してゐたが、のち白隠が松蔭寺に住するに及んで往いて親しく参叩した、白隠はその時三十六歳で、その門下に實參の衲子あるは脱首座が始めであつた。脱首座、壽短くて早く世縁を謝し名を天下に成すに及ばなかつたが、有道の大徳であつた。政女が淨き信心を見て是れ度すべきの器となし、時々佛參に来るのを引き留めて親切に禪要を説き示した。政女も熱心に参問して辨道ますます努めた。その後さうして日を重ねるに従つて彼女が工夫はいよいよ純熟し、つひには向上の玄旨に對する一大疑團が一個黒漆の鐵崑崙となつて胸のうちに凝結するに至つた。

「坐禪は習禪にはあらずたゞ是れ安樂の法門なり」とか「道本圓通争てか修證を假らん、宗乘自在何ぞ工夫を費さん」とかいふ祖師の提示は、もと學人をして誤りなき趣向の標的を知らしめようとなされた第一義底であつて、末學凡夫の參禪に於いては矢張

り工夫修證の一條路を辿つて後所謂安樂の境地に至らねばならない。たゞ黙つて壁に面つて坐禪せよと云つても、初心の者には妄念雜慮紛々として停止するところなきまで競ひ起る。それを散亂煩惱と名づける。散亂を漸く鎮めたと思ふと、今度は眠つたやうに死んだやうに心の働きを喪つてしまふ、それを昏沈煩惱と名ける。若し全く感情を殺してしまひ、理性の働きを奪つてしまふといふならば、それは石地藏を据えて置くも同じである。

で、先づ雜然たる心の調整が出来たら直に自己門頭の問題を捉へ來つて全意識を集中して専心に工夫思量を運らす。禪門に大疑行といふのはそれである。直下に即身是佛たることを明らかにするといふ禪の修行に於いては寸刻も措くことなく、佛とは如何、我とは如何、宇宙とは如何、心とは如何、如何、如何と大疑團を懷いて之れが解決に間斷なき刻苦砥礪をつゞけねばならない。その大疑團が氷解したとき、そこに動きなき大信念が確立する。そこに限りなき大安樂の場面が展開されるのである。

ある心理學者は、心理學でいふ注意を説明して斯ういつて居る。無意注意に二通りある、初めから全く無意なると、有意注意から導かれたものとである。有意注意がその頂點に達するとまた無意注意の状態に復歸する、宋僧が謂ふ所の「敬」とか「主一無適」とか、または佛教の所謂「三昧」とかは恐らくこの心理状態を指すものであらう」と。人の心の働きはその通りで、紛然雜然たる理知情意を整頓し統一するにつひに明鏡止水の如く澄徹する、そこに本来の自分を見出すの明が煌き出るのである。故に祖師は坐禪の工夫を示して「箇の不思議底を思量せよ」といひ、更に「不思議底、如何が思量せむ、非思量」と説かれた。如何、如何と眞の疑團を懷いて工夫を凝らすはやがてこの不思議底に超入するの前提である。不思議底はあらゆる思量底を盡したところに現はれた効果で、如何、如何の問題がソコで斯様斯様と解る。斯様斯様と解つたら更に非思量底の境地になり切り、玄機まさに體中に圓に、所謂心の欲する所に從つて矩を踰えざる大安樂自在の妙用となつて體現されねば未だ眞でない。

政女の大疑行は驚くべき精力を以てつゞけられた。晝は日ねもす靜坐工夫を凝らし、殆ど食事をも忘れ、夜は夜もすがら夢寐の間にもさし措かず探究するといふ風であつた。

斯んなこともあつた。ある日朝から例のやうに端座靜觀を始めたが、恍惚として工夫三昧に入り、總ゆる身邊の雜件は彼女の頭から消えて失くなつた、時の経過なども彼女には没交渉であつた。午時になつても炊事に手を着けようとしめない。戶外から遊びに出てゐた子供が歸つて來たが喫べる御飯がない。シク／＼泣いてゐるのを見て隣の人が可哀相に思つて連れて行つて飯を食はした。

またあるとき子供が歸つて來ると、愕然として工夫に働いた政女は怪訝な顔をして「お前は誰家の子だつたな」と訊いた、子供は愕然して大聲をあげて言つた。「お母さん、正氣を喪つたんぢやないか」政女は「あゝ、あゝ」と單調な、返事のやうな、返事ともいはぬやうなことを言つて矢張茫然してゐた。斯うした極端なほど一心こめた

實究が幾日かついた。

喩へばこゝに一個の窖がある。中は七珍萬寶の無盡藏である。道を辿つてヒヨツク
リその前に出た。ハテ何があるのかと一寸頭を突つ込んで覗いて見た。中はあやめも
わかぬぬば玉の眞闇、幾ら眼を睜り心を鎮めて見直して見ても何が何だか皆目明らな
い。幸にして手に炬火が用意されてゐた、それに火を點けて翳して見ると、燦然とし
て眼を争ふ珍寶の堆積であつた。この場合誰か狂喜しない者があらう。開發悟道の容
子は恰度それである。

人々心の奥底には平等に一大寶庫がある。昏散煩惱を拂ひ除けて漸く眞の疑團を懐
くやうになつたのは心の奥の寶庫の前に出たところである。如何、如何といよ／＼工
夫純熟して殆ど喪心するまでになつたのは、窖の中に頭を突つこんで闇黒裡に憤
然たる貌である。

政女は今や其點まで撞き進んだ、頻りに眼を睜り手を舉げて摸索してゐるのであつ

た。と、ハツと持つてゐた炬火に氣がついた。何人にも皆一樣に佛性といふ光明赫耀た
る知慧の炬火がある、光明の前に存し得る闇黒はない。政女はハツと氣がついたとき
本具の知慧の炬火は高く翳された、從來凝結してゐた迷妾の闇黒は跡かたもなく消え
失せた。自家の寶藏は八面に押し開かれたのである。

無價の寶珠を懷き歡喜踴躍して早速原の松蔭寺に白隱を訪うた。白隱は數段の因縁
を提起して仔細に點検するのであつた。政女の見解はそれに應對して一も凝滯すると
ころなきを得た。白隱はつひにその徹悟を認許した。

その當時雲山といふ禪徳があつた。亦一方の善知識で、常に白隱と親しく相往來し
てゐた。ある日例ものやうに松蔭寺を訪れて白隱の室に入り隔意なき談笑をしてゐる
と、丁度そこへ政女が来て白隱に謁を求めた。雲山その時は白隱の後に偃臥してゐた
が、訪なふ客ありと聞いて起きて室を出ようとすると、白隱が手を以て制し、「起きる
な、起きるな」といふのでそのまゝそこに臥てゐた。政女が室内に入つて來ると白隱

は先づ一擲を與へて言つた。「夢中西來意作塵生」政女は毫も擬議することなく所解を呈示した。白隠はそのまゝ首肯して休んだ。やがて政女が出て行くと、雲山は起きて来て、「適來の一體何人か」と問うた、白隠が詳しく彼女の修行證入の事實を語つた。「あゝ彼は一婦女ではあるが實に飽參衲僧家の活作用を具へて居る」と謂つて雲山は非常に驚き且つ賞歎した。彼女の禪機はこの類であつた。

參禪は須くこれ疑情を起すべし。小疑は小悟、

大疑は大悟を説く。——禪關策進

何程坐禪しても、眠るか或は色々の事を思ひ、

ぶらりとして坐禪するならば、まことの坐禪に

てはなし。

——霧海指南

大死一番大活現成

遊女大橋

人生の流轉幻滅——才色雙美の佳人——無垢の百合合泥中に委す——客の指示——放下着の處拾得了——タゴールの知言——大死底の修行——管子の言——宇宙は一大寶藏——香嚴と靈雲——雷電を坐斷す——白隠禪師に見ゆ——栗原一素に配す——その最後——その詞藻

爛熟した春の香りは天地に溢れ、樹々の枝頭に紅銀繡を織り出して思ふさま行樂の人を酔はしめる、それも瞬時、風拂ひ、雨たゞき、雪と散り、泥に塗れ、いつしか若葉がぐれの醜い鬼葉に、空しく行く春の悲哀を止める。よし綺羅殿裡の優遊もつひに有爲の悲しみを告げ、たとひ翡翠帳中の歎樂も忽ち有漏の歎きを免れぬ。まこと榮華は春の夜の夢、たとへば風の前の雲である、水の上の泡である、乍ちに散じ倏ちに消える。こゝに浮沈、彼處に消長、榮枯苦樂定めなきは人の世の常態である。測り知り難き運命の糸は、撞に人の子を操り、慘酷に翻弄する。律女はその運命の手に苛まれた一人であつた。